

富山県魚津市

松倉城郭群調査概要

魚津市教育委員会

序

山、川、海に囲まれた自然豊かな地である魚津市には、越中三大山城の一つである松倉城があります。そして、この松倉城を取り囲むように多くの山城や砦が配置され、広域な城郭群を形成していたことが大きな特徴といわれています。また、松倉城の本丸部分は県指定の史跡であり、その重要性の周知を図るとともに大切に保存されています。

魚津市教育委員会では、平成二十五年度より松倉城郭群の学術的な価値付けを行うことを目的に、国、県の補助を受けて分布調査、測量調査、史料調査などを実施してきました。本書では、平成二十五年度、二十六年度に蓄積した基礎資料について報告するものです。

今回の調査事業が、地域の歴史を解明する一助になるとともに、先人の残した貴重な遺跡を保存、活用するための資料になれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、多大なご協力を頂きました鹿熊地区の皆様や関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成二十七年三月

魚津市教育委員会 教育長 長島 潔

目 次

I	位置と環境	序														
II	調査の経緯															
III	松倉城跡の歴史															
IV	松倉城跡の縄張															
V	平成二十五・二十六年度の調査															
1	城下町の分布調査															
2	地名調査															
3	史料調査															
(1) 近世の史料に見る松倉城跡とその周辺																
・『鹿熊古城の記』																
・『五ヶ山大牧入湯道之記』																
・『魚津在住御用方日記』																
(2) 北山城を守った神保右衛門																
4	測量調査															
5	松倉城跡周辺の調査															
(1)	室田テラヤシキ															
VI	特論 本能寺の変と松倉・魚津城															
VII	松倉城関係年表															
38	34	31	31	28	24	21	19	18	18	17	15	15	11	3	1	1

例 言

1 本書は、平成二十五・二十六年度に実施した富山県魚津市字城山に所在する松倉城跡の調査を中心とした調査概報である。

2 調査は、国庫補助金・富山県補助金を受けて、魚津市教育委員会が調査主体となり実施した。

3 調査は、松倉城郭群調査検討委員会（委員長 高岡徹）を設置して行つた。事務局は、魚津市教育委員会生涯学習・スポーツ課に置き、文化係が担当した。

4 調査は、魚津市教育委員会が調査主体となつて実施した。

5 本書の執筆は、高岡徹氏の全面的な協力のもと、III、IV、V、VI、VII章を高岡氏が、その他を的場茂晃（生涯学習・スポーツ課）が担当した。

6 本書の編集は、的場が担当した。

7 現地調査及び史料調査は高岡氏、西井龍儀氏（松倉城郭群調査検討委員会委員）との協力があつた。

8 採集した遺物については、すべて魚津市教育委員会が保管している。

9 調査にあたつては、地元松倉地区の方々にご協力を得た。記して謝意を表します。

I 位置と環境

魚津市は、富山県の北東部に位置し、面積二〇〇km²余りである。市内には北から順に、布施川、片貝川、角川、早月川と主要な四つの河川が市域を貫流し、日本海へと注ぐ。片貝川や早月川は、山地から海へ至る高度差に対し、流路距離が短いことから、県内でも有数の急流河川として知られている。

魚津市の地形は、北アルプス立山連峰の一つである剣岳から連なる毛勝山や僧ヶ岳等の山岳地帯とその前山をなす丘陵地帯、平野部の扇状地で構成される。市の平野部は僅かで、発達した洪積台地は河川によつて形成された河岸段丘が顕著にみられる。

松倉城跡は、角川右岸の丘陵上に位置する(第一図)。松倉城跡の周辺には多くの支城があり、角川两岸の丘陵上には、升方城跡、水尾城跡、水尾南城跡、大熊砦、焼山砦、石の門砦等、多くの山城や砦が立地している。松倉城跡を中心として支城や砦を配置し、広域な城郭群を形成していた。

鹿熊地区を貫流する角川は、早月川と片貝川の分水嶺付近に水源をもつ河川である。この角川流域にある鹿熊地区は、現在、宅地と圃場整備の行われた整然とした水田、森林等で占められている。しかしながら、これまでの調査等で中世から戦国時代にかけての土師器皿や中国製の磁器、多数の国産陶磁器が見つかっている。また、「城殿」、「城割」、「オヤシキ」、「テラヤシキ」等の、城に関連すると思われる小字名や地元での呼び名が残つており、松倉城跡の城下町があつたとされる。

II 調査の経緯

松倉城跡に関する調査は、地元郷土史家や城郭研究者によつて精力的に行われており、詳細な縄張図や古文書等の調査が行われている。魚津市教育委員会では、平成四年度から七年度にかけて、国庫補助事業として松倉城跡範囲確認調査を実施した。これは松倉城跡の詳細な地形測量図と考古学的の調査による遺構の内容や年代の特定を目的としたものである。試掘調査では、本丸と二の丸間の空堀の堆積状況や築城年代の推定、松倉城跡中腹にある平坦

面（大見城平）の築造時期等が確認された（魚津市教育委員会一九九九）。

その後、平成十三年度から十七年度にかけて、国庫補助事業で松倉城跡群範囲確認調査事業として、松倉城跡単独ではなく、周辺に所在する山城・砦や城下町（居館・寺院・町屋）を含めた遺構の範囲確認や遺存状況の把握、測量調査等を実施した（魚津市教育委員会二〇〇二～二〇〇六）。

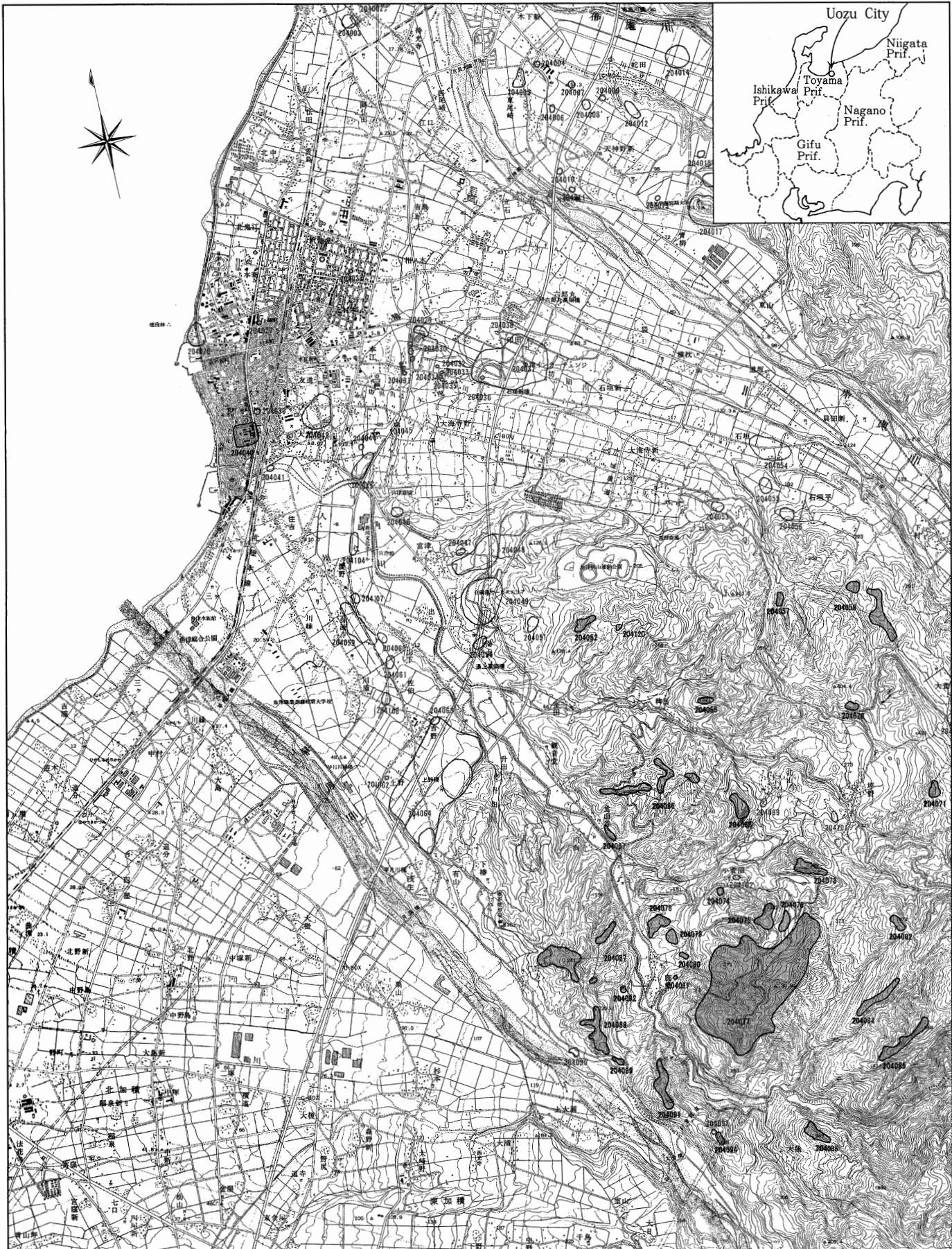
試掘調査は、平成十三年度に淋光寺遺跡・鹿熊オヤシキ遺跡・鹿熊三枚田遺跡、平成十四年度に鹿熊ホーベン遺跡、平成十五年度に鹿熊矢竹遺跡、平成十六年度に石の門砦で実施した。これらの試掘調査では礎石の可能性を示す石列や炭化物集中範囲等の遺構が確認されている。出土した遺物は、中世土師器皿のほかに、白磁や青磁、瀬戸美濃、珠洲、越前等、十五世紀後半から十六世紀代が主体であった。

測量調査は、平成十四年度に鹿熊ホーベン遺跡、平成十五年度に升方城跡（市指定史跡）、平成十六年度に水尾城跡（市指定史跡）、平成十七年度に天神山城跡（市指定史跡）で実施した。鹿熊ホーベン遺跡は、角川右岸の山裾にある土壘と平坦面で構成された居館跡もしくは寺院跡と推定されている遺跡である。

平成二十五年度からは、松倉城郭群調査検討委員会を設置し、松倉城郭群としての価値を明らかにし、また遺跡の保存・活用を図るために、総合的な調査を実施することとなつた。

平成二十五年度の調査は、松倉城の城下町とされる鹿熊地区の遺物分布調査、地名・伝承等聞き取り調査、地籍図調査、文献・絵画史料等調査、支城・砦等の縄張調査を中心に、基礎資料を得ることを目的として行つた。

平成二十六年度は、平成二十五年度からの継続調査に加え、松倉城跡の追加測量や新たに発見された推定寺院跡の縄張調査等を実施した。



第1図 松倉城跡と周辺の山城跡・砦跡（縮尺 1/50,000）

204040	魚津城跡	204052	室田砦	204057	大谷砦	204058	大谷尾根砦	204065	稗畠砦
204066	後藤城跡	204067	金山谷横穴状遺構	204068	北山城跡	204070	荒惣山砦	204071	坪野城跡
204073	小菅沼C城跡	204074	武隈屋敷跡	204075	小菅沼A城跡	204076	小菅沼B城跡		
204077	松倉城跡	204078	焼山砦	204079	鹿熊オヤシキ遺跡	204080	淋光寺遺跡		
204081	鹿熊ホーエン遺跡	204082	やせもり砦	204084	長藏砦	204085	中之堂砦	204086	赤坂砦
204087	升方城跡	204088	南升方城跡	204089	石の門砦	204091	水尾城跡	204092	鹿熊城殿遺跡
204094	水尾南城跡	204120	室田テラヤシキ遺跡						

III 松倉城跡の歴史

松倉城は魚津から角川を遡った上流の右岸にそびえる鹿熊の小字「城山」(標高四一八・五m)一帯に築かれた。この城は南北朝期の十四世紀前半より戦国末期の十六世紀末に至るまで一途中の空白期間を含め一約二百六十年の長期にわたって使用された一大山城である。砺波市の増山城、高岡市の守山城、冰見市の湯山城と共に「越中四大山城」と称してよいと思う。とりわけ越中の東部、新川地域の中では最大の山城である。本稿はその長きにわたる歴史の概略である。



写真1 松倉城跡遠望。左端の小高い山上が平ノ峰(古松倉)城跡、右端の山上が現在の(新)松倉城跡にあたる

〔古松倉城期〕……南北朝・椎名慶胤期 守護の拠つた山城

松倉城が史上に初めて登場するのは建武五年(一三三八)七月のことである。『太平記』によると、この年、南朝方の越後勢が越中を通過するのを防ぐため、守護普門俊清が越後との国境に布陣したが、大半が討たれて松倉城へ引き籠もつたという。こののち、松倉城には守護を務めた桃井氏や新川郡の守護代椎名氏、越後上杉氏らが拠つたが、すでにこの頃より守護の拠る城郭として使われていることに注目しなければならない。

その後、康永三年(一三四四)に守護を罷免された井上(普門)俊清が幕

府に敵対すると、新たに守護となつた桃井直常や能登の吉見勢が討伐に差し向かれ、貞和二年(一三四六)七月、松倉城と水尾南山要害(水尾南岩)、水尾城を攻め、俊清を閏九月に降参に追い込んだ。幕府方に従軍した能登得田氏の軍忠状によると、能登勢は七月十八日に松倉城を攻め取っている⁽¹⁾。しかし、俊清は翌年再び幕府に敵対して桃井直常や能登の吉見勢の討伐を受けている。この時も俊清は松倉城にたて籠もつたが、能登の吉見氏頼の率いる軍勢がこれを攻め、貞和四年十月十二日夜に松倉城を放棄に追い込んだ⁽²⁾。敗走した俊清はいつたん内山城(所在地不明)にたて籠もつたが、やがて勢力も衰え、逼塞を余儀なくされたと思われる。

桃井直常と松倉城

続く応安二年(一三六九)には一時越中の守護を務めた桃井直常が幕府に敵対し、能登・加賀・越中の三国で幕府方と戦い、九月には松倉城へ攻撃に向かつた⁽³⁾もの、桃井方の軍事行動はなおやまず、翌年三月五日松倉城から桃井直和(直常の子)が打つて出たが、十六日に長沢で守護斯波義将の軍勢と戦い、討死を遂げる。このため、十八日には松倉城にたて籠もある桃井余党が降参・没落したという⁽⁴⁾。直常自身も行方をくらましたのである。ところが、翌四年七月、直常は不死鳥のように蜂起し、越中西部の五位庄で能登吉見勢らと戦つた。しかし、直常はこの戦いには敗れ、八月八日夜、陣を引いて退くに至つた。この後、直常の消息は絶たれている。

このように桃井直常も、この時期には松倉城を最後の頼みの拠点として使っていた。つまり、松倉城は南北朝期において守護クラスの武将が最後にたて籠もある場にふさわしい山城として認識されていたのである。しかし、そればかりではなかろう。そこには井上(普門)氏や桃井氏を支える勢力(椎名氏など)が地元に存在した可能性が潜んでいよう。

高く険しいピークに築く

なお、南北朝期に登場する松倉城は現在地ではなく、そこから尾根続きの北東にそびえる平ノ峰に存在したと推測される。平ノ峰城は現在地の主郭より約二m高く、険しいピークに立地する。その立地のあり方は南北朝期の

山城にふさわしく、基本的な縄張のあり方も当時のものと合致する。ここで、平ノ峰に存在した初期の松倉城を「古松倉城」と便宜上呼んでおきたい。

室町時代に入ると、十五世紀初頭以降、椎名氏が守護畠山氏のもとで新川郡守護代を務める。そして、北陸街道沿いの魚津に政庁としての機能を持つ居館を構えたとみられる。但し、平地の居館は要害性に乏しいことから、万一戦乱が起きた際には心許ない。そこで南北朝期にたびたび使われた天陥の松倉城を、そうした事態にたて籠もる城(詰城)として使うこととし、平ノ峰の城跡(古松倉城)の整備を行つたのであろう。無論、日常の本拠が魚津の館であつたことは言うまでもない。

『満済准后日記』によると、応永三十五年(一四二八)二月、管領畠山満家が越後での騒乱に備え、同国境に近い松倉城を警戒態勢下に置いていた。

十五世紀に入つても、松倉城は越中東部の要衝として注目されていた。しかし、魚津の館を本拠とした時代は、永正十七年(一五二〇)新庄の戦いで椎名慶胤が討死したことで終わりを告げたと考えられる。この年、越中へ進攻した長尾為景は国境の境川で椎名勢を打ち破り、十二月の新庄(現富山市)の戦いで慶胤や神保慶宗・遊佐弥九郎などの越中勢を敗北に追い込んだ。この直前には守護畠山氏より新川郡の守護代職が為景に与えられている。この後、椎名氏は長尾氏に従属する形となり、為景は椎名氏に代官として新川郡の統治を任せることになる。

〔新松倉城期〕……椎名長常・前田利家期

現在地への本拠移転

慶胤の跡を引き継いだのは庶家の長常である。長常は長尾為景の支援を背景に新川郡における権力の確立に努めた。同時に椎名氏がそれまで詰城として使つてきた平ノ峰の(古)松倉城を尾根続きの南西にある現在地に移し、これを本拠(新松倉城)にしたと考えられる。もはや平地の城館を本拠として使う状況ではなくなつて、日常の居住施設も含んだものであつたから、平場の少ない平ノ峰では無理があつた。具体的には現在地の本丸周辺に軍事施設としての山城を構築し、麓の鹿熊集落を見下ろす高台の「大嵐」に日常の居館を設け、政庁の機能も持たせたと考へられる。これに合わせるように、元の鹿熊集落を中心とした角

川沿いの平地や山麓などに主要な家臣の屋敷や寺社、職人、町人などが住む城下町の原型が形成されていったであろう。

神保氏の進出と脅威

しかし、長常の前途にも暗雲が漂つてきた。強力な支援者であつた長尾為景が天文十一年(一五四二)に没し、越後の勢力が後退したことにより、神保氏を再興した長職が西から神通川を越えて新川郡に進出し、翌年富山に築城したからである。このため、椎名氏と神保氏の間に抗争が起つたが、能登畠山氏の仲介により天文十三年には両者の間に和議が成立した。だが、結果は神保長職の富山築城を容認するものであり、長常は次第に神保氏の圧迫を受けるようになつた。

天文年間の末頃より椎名氏の当主は長常から康胤に変わつたとみられる。永禄二年(一五五九)には神保氏との間で抗争が再発し、長尾景虎(後の上杉謙信。以下、「謙信」と記す)による調停が行われた。しかし、神保家中にはこれ就不満とする者がおり、武田信玄に通じる動きを見せたため、翌三年三月、謙信は越中に出陣し、神保長職の居城である富山城を攻めた。これに対し、長職は富山城を放棄し、いつたん西の増山城に逃れたが、謙信の追撃を受けると、城を捨て落ち延びて行つた⁽⁵⁾。この後、長職は富山城に復帰できなかつた。

しかし、長職の新川郡進出の動きは止まなかつたようであり、謙信は永禄五年(一五六二)七月、越中へ出陣してその動きを封じた。ところが、九月五日、今度は勝興寺・瑞泉寺の二大寺院から支援を受けた長職が、神通川で上杉方を破ると、神保勢は勢いに乗つて「金山」の近辺まで攻め入り、途中の堀江・新庄などの城も攻略している⁽⁶⁾。

「金山」の地名由来

この内、堀江(現滑川市)は当時上杉方に属していた土肥氏の城だが、新庄城が登場するのは、この城がすでにこの頃より富山城と松倉城を結ぶ、繋ぎの城であつたことを示している。ここも椎名勢や、土肥勢によつて守られていたのであろう。注目されるのは、この時史料に「金山」の地名が初めて登場することである。内容から見て、椎名康胤の本拠であつた松倉城の城下町

を指すのであろう。以後、「金山」の地名はたびたび史料に登場するが、このことは椎名康胤による本拠地(松倉城と城下町)作りが永禄年間の初めにある程度整い、内外にも存在を知られていたことを意味する。

ちなみに「金山」の地名は鹿熊の奥の山中で金を産出したことに由来すると思われる。文化八年(一八一二)の『松倉山由来書上申帳』に「かね(金山)始り之義ハ応永年中之頃よりも、かね掘出候様ニ承伝ヘ申候、天正年中之頃迄ハ、松倉之城主河田豊前守殿江御運上銀指上候様承伝ヘ申候」とあり、室町時代の応永年間(一三九四～一四二八)の発見と伝えられている。そうであれば、すでに戦国期には金山の存在が知られていたはずであり、その山への入口を押さえる松倉城の存在は大きい。おそらく椎名康胤の時期には、そこから産出された金が財源に充てられ、栄えたはずである。後に上杉氏がこの松倉を拠点化し、長らく維持した理由もそこにあると思われる。

それはともかく、松倉城の近辺まで神保長職と一向一揆勢が押し寄せたことは、椎名方にとつて一大事となる事態だつた。報せを聞いた謙信は直ちに出馬し、神保方の出城を攻略し、長職がたて籠もある増山城に向かい、近辺に火を放つて孤立化させた。その結果、長職は能登の畠山義綱を頼つて謙信に降伏した⁽⁷⁾。以後、長職は上杉氏に従属することになる。



写真2 城下町周辺の中世五輪塔（室田地内）

「金山」の旅籠に泊る

ところで、松倉城が危機を脱した翌永禄六年(一五六三)十月六日、二人の旅人が「越中金山」の城下町に入り、旅籠に泊つた。旅人は京都醍醐寺(真言宗)の僧侶であり、何らかの寺務のため、北陸経由でこの年の九月から翌年十月まで越後・関東・南東北を旅した。この時の旅の経費を記した『永禄六年北国下り遣足帳』によると、往路は加賀から現在の小矢部市内を通り、おそらく富山付近を経由し、先に記した日に松倉城下町に着いたことになる。史料を分析した小島道裕氏によると、宿泊代は一人あたり二十四文(計四十八文)で、その内訳は夕食代と朝食代が十二文ずつである。翌日、二人は「越中ライ庄」(大家庄、現朝日町)に泊り、その後越後へ向かっている。なお、帰路は翌七年越後から入り、十月九日に前泊地の三日市(現黒部市)から「大津(小津、魚津のこと)」に着き、旅籠に泊り、その後新庄を経て、飛驒へ向かっている。魚津での宿泊代は六十文である⁽⁸⁾。

この史料で何よりも重要な点は、戦国期の永禄六年の時点での「金山」に、また翌七年の時点で「大津(小津、魚津)」にそれぞれ旅籠(旅館)が存在したことだろう。旅籠は史料の上で「ハタコ」と表記されているが、とりわけ中世の松倉城下町に存在を確認できる史料としては唯一であろう。場所は現在の鹿熊集落の一角であろうか。ともかく、この史料から、城下に町場が存在したことがうかがえ、これまで知られることのなかつた松倉城下町の都市的な姿が具体的にイメージできるようになつた。この頃は椎名康胤のもとで城下町も賑わいを見せていたのだろう。その意味では貴重な史料と言える。

謙信、椎名康胤を攻める

この頃、上杉謙信は越後から長尾小四郎景直を康胤の養子に送り込んだ。それは永禄五年から七年にかけての時期とみられる。先の永禄五年の一連の戦いで椎名氏が大きな打撃を受けたことへの梃入れの意味もあつたであろうが、同時に椎名家臣団を上杉方に取り込む狙いもあつたはずである。一方、康胤としては永禄五年の戦いで謙信が長職を討滅せず、降伏を認めて婦負郡以西に一定の支配権を安堵したことへの不満が残つたとみられる。そうしたことが伏線となつて同十一年(一五六八)、康胤は武田信玄と通じて謙信に背く道を選んだ。椎名の動きは翌年一月、飛驒の三木良頼から謙信に宛てた書

状⁽⁹⁾にも報告されている。

このため、永禄十二年八月、ついに謙信は敵対した康胤を攻めるため、出陣を決意する。八月二十三日付で謙信が直江景綱らに送った書状⁽¹⁰⁾によると、上杉勢は同月二十日に国境の境川を越え、各地に放火しながら堀切の館を攻略し、二十一日は石田に人馬を休めた。二十二日は松倉城のある金山へ攻め込み、要害(城)のそばに陣取つた。同夜半過ぎ、新庄城を奪取して堅く守らせたところ、二十三日の申の刻(午後四時頃)には椎名方が金山根小屋(松倉城下町)を自らの手で焼き、様子が一変した。今や松倉城は本城だけの「巣城」となり、孤立している。あちこちの田んぼの稻なども打ち散らした——とある。

まさに圧倒的な兵力と行動で、松倉本城以外はすっかり上杉方によって押さえられ、瞬く間に康胤の拠る本城が孤立する事態となつてゐる。麓の屋敷や城下町に自ら火を放つたのは、籠城して戦う決意を示したものだろうが、前途は暗かつたと言わねばなるまい。

なお、かなり離れた西の新庄城が松倉攻めの一環として攻略されている。これは同城がこの頃、松倉城の支城的な性格を持つていたためかも知れない。この点は今後の課題だが、少し後の元亀三年(一五七二)に一向一揆が攻勢に出た際、上杉部将鰺坂長実が新庄城に在番していたところを見ると、新川郡西端の境目を守る意味で、椎名氏の管理下にある城郭だった可能性がある。

椎名旧臣による松倉城管理

康胤が松倉城に籠城後、その有力な支城であつた魚津城には謙信の部将河田長親が入つた。そのことが確認できるのは、十月六日付で魚津城を守る小越平左衛門・長尾紀伊守に宛てた謙信の書状からであり、謙信と河田長親が越中西部へ進んで留守の間、松倉の椎名勢が出撃するであろうから、長親が魚津に「帰城」するまで慎重に城を守るよう指示している⁽¹¹⁾。以後、長親は一貫して越中国内に在番する上杉部将を統括する立場にあつたとみられる⁽¹²⁾。謙信は十月二十七日、春日山に帰城しており、この間に椎名康胤との間で和議が成立し、何らかの決着を見たと考えられる。

和議の詳細な内容は不明であるが、一つの推測を述べれば、①謀反を起こした康胤自身が松倉城から退去し、②上杉方から養子に入った長尾(椎名)小

四郎景直が当主の座を引き継ぎ(小四郎がどの程度椎名家臣団を掌握していたかは不明。形の上だけかも知れない)、残された家臣団を率いる、③松倉城は当分の間、景直を中心とする椎名家臣団に預ける——ということだつたのではないだろうか。

この推測を裏付ける興味深い史料がある。すなわち、享保九年(一七二四)『小幡式部由緒帳』⁽¹³⁾の内、高祖父神前故和泉の項には、康胤の死後、跡を相続する子孫がなかつたため、家老の神前和泉・小幡九助の兩人が相談し、松倉城を三年の間支配したと記している。

康胤の家老の内、小幡氏は後に前田家に仕えた。由緒帳という性格から、内容は慎重に吟味する必要はあるが、このような記述は他に見られない、目新しいものであり、十分考慮すべき点を含んでいる。原文の「康胤の死後」を「康胤の松倉城からの退去後」と読み替えると、その後を「家老の神前・小幡氏が相談しながら松倉城を三年間支配した」とあるのは、家臣団については、そのまま松倉在城が認められ、養子の長尾小四郎はいるものの、それは形の上であり、実質は家老二人が家臣団を率い、上杉方に属して松倉城を管理したことを意味するのである。

康胤の最後と旧臣らの海賊行動

では、松倉城を去つた康胤はどうなつたのか?その後の康胤の動向については、元亀元年六月五日付武田信玄書状に手がかりが見られる。それは織田信長の右筆や奏者を務めた武井夕庵に宛てたもので、武田信玄の使僧長延寺実了が、折から織田方による浅井攻めで騒然とした近江の北部に留まつているとの情報について、行方を尋ねながら、越中の椎名(康胤)が加賀一向一揆と共に加勢として大坂本願寺に向かつたことを告げている。

これによつて、松倉城を追われた康胤が加賀一向一揆に加わり、元亀元年に大坂本願寺に向かつたことが明らかとなる。確かに松倉城を追われた康胤にとつて、頼る所は本願寺しかなかつたと思われる。この後、一向一揆のもとにあつた康胤はたびたび上杉側に松倉への復帰を働きかけてゐるが、それはかなわず、『越登賀三州志』によると、天正四年(一五七六)謙信が砺波郡の蓮沼城(現小矢部市)を攻めた際、城主となつてゐた康胤が自害して城が落ちたと伝えてゐる。

一方、魚津城に置かれた河田長親は永禄十二年十一月五日付で花前盛貞に宮津八幡宮社職を与えたのを皮切りに、新川郡内で着々と知行の安堵や宛行を行い、椎名氏に変わり支配権を行使していった。

また、元亀三年八月以降、富山周辺で一向一揆と戦つた謙信は翌四年四月に松倉まで納馬し、まもなく春日山へ帰陣した。おそらく、これより少し前の同年初めには松倉城が旧椎名家臣団から正式に上杉方に接収されたのであろう。さらに、四月二十五日付で飛驒の江馬輝盛が河田長親に宛てた書状⁽¹⁴⁾によると、河田ら上杉方が「新地両城」を堅固なものに構築したことに満足の意を表明している。ここで言及されている「新地両城」こそ、新たに上杉方が拠点とした魚津・松倉の両城を指すものとみてよい。とすれば、松倉城は先に述べた謙信の納馬(松倉入城)に合わせる形で、改修・整備されたことが明らかである。魚津城についても同様であり、その責任を担つたのは寵臣河田長親であろう。以上の点からも、上杉方による松倉城の接収と直接管理への移行を確認できる。

以後、松倉城は魚津城と同様、上杉部将が在番する支城となり、河田長親が魚津城と共に守将を務めることになる。そして天正十年まで、両城は上杉方の越中國内における最大の支配拠点として機能したのである。

なお、元の主君康胤の復帰がかなわず、主家を再興できずに城を出されたことは椎名家臣達にとって不本意なものであつたろう。浪人となつた椎名家臣の一部は、その後西方の康胤や一向一揆に合流し、上杉方への抵抗を試みるようになつた。五月十四日付の謙信書状によると、椎名浪人達が新川郡の海岸を襲つていることについて、その対策を指示している。しかし、一揆方の抵抗もやがて下火になつていつた。強力な後援者だつた武田信玄が死去したからである。この後、天正四年に謙信は本願寺と和睦し、越中國内の制圧を果たした。謙信が天正六年に急死すると、織田信長が京都に亡命していた神保長職の子、長住を越中に送り込んだ。こうして織田と上杉の戦いが始まつた。

織田軍、月岡野合戦で勝利

長住は五月頃、飛驒を経由し越中へ入国したが、少し前の四月晦日付で織田の部将佐々長穂より河田長親に対し、謙信死去を機に織田方に付くよう申

し入れが行われた⁽¹⁵⁾。無論、信長の意を受けた誘いである。ここで長親が同意すれば、越中國内の中上杉方は一気に崩れると読んでのことである。しかし、長親は誘いを断つた。神保方は当初、飛驒口周辺の地盤固めを進め、ようやく秋に入り、美濃から織田部将斎藤新五郎を援軍として迎え、富山に向かって北上を開始した。この時、長親は椎名小四郎と共に織田軍を迎撃ち、十月四日に月岡野(現富山市)で斎藤勢と一戦に及んだが、織田方が勝利し、上杉方三百六十人を討ち取つたという⁽¹⁶⁾。この結果、織田方が富山へ進出する道が開かれたのである。

一方、越後では謙信の死後、家督相続をめぐつて景勝と景虎が争う「御館の乱」が起き、約三年間にわたり国内を二分する戦いが続いた。この間、越中への援軍は送られなかつた。逆に景勝からの要請を受け、河田長親が兵を率い、同六年十二月、能生まで出陣し、景勝支持を表明している。これに対し、椎名小四郎の方は月岡野の敗戦以降、織田方に付いたようであり、同じ月の十日付で信長から富山南方の太田保が与えられている⁽¹⁷⁾。この時点以降、小四郎は松倉城へ復帰することはできなかつたであろう。小四郎の離反を受けて、景勝は翌七年六月、越後国内にあつたその旧領を本庄顕長に与えている⁽¹⁸⁾。小四郎は同九年(一五八一)九月頃まで織田方に属し、越中にいたようだが、その後の消息は不明である。

「御館の乱」の終結により、景勝が謙信の後継者の地位を確保したが、越中では上杉方の駆逐を目指す神保長住が、同八年八月、上杉方の守る新庄城を攻めている。そして、翌月二十二日付で信長側近の堀秀政・武井夕庵に宛てた書状によると、新庄にはいつたん押さえを置き、そのまま「金山(松倉城下」まで攻め込み、あちこちに火を放つて収穫前の稻を刈り取つたという⁽¹⁹⁾。まもなく神保勢が撤退したからいいようなものの、松倉・魚津の兵だけでは反撃する力がなかつたのだろうか。報せを受けた景勝は能生まで来て、神保勢の撤退を聞いている。ひとまず危機は脱したのである。

河田長親の死と景勝の対応

長らく越中國内の中上杉諸将を支えた河田長親は、同九年三月二十四日、松倉城において病没した⁽²⁰⁾。これに伴い、景勝は直ちに松倉城の守りを固める処置を取つた。実は、景勝は前年の織田方の攻勢を受けて、この年の三月九

日、自ら越中へ出陣し、織田方の最前線である小出城(現富山市)を包囲していた。折から神保長住・佐々成政らの織田諸将は信長の御馬揃のため上洛しており、景勝の攻勢はそのすきに乘じたものであった。しかし、織田方は城を守つて持ちこたえ、やがて成政らが駆け付けたことにより、同月二十四日、景勝は魚津城へ撤退したのである⁽²¹⁾。

河田長親の病死はまさにその撤退の日であつた。景勝が織田勢の到着と対決を前に兵を引いたのは、あるいは頼りにしていた長親の死が引き金になつたのかも知れない。次の史料は景勝が長親の病死後に発した指示⁽²²⁾であり、宛先の山本寺景長・中条景泰・竹俣慶綱・吉江宗信はこの時、松倉城に在番していた部将である。実はこの全員が翌年六月に魚津城を守つて討死している。

河田豊前守病死、因茲、彼城備等堅固之様可被申付候、在番之衆も當十日二被相立候間、近々可為參陣候条、万緒可有御相談候、恐々謹言、

「天正九年」
(朱書)

四月八日 「景勝公御書ノ由」

山本寺松蔵殿
中條越前守殿
竹俣参河守殿
吉江常陸入道殿

この中で「彼城(松倉城)の備えなどを堅固にするよう」命じているのは、撤退に伴い、織田方の反撃を予想したからであろう。そして守備の兵力を増強するため、新たに越後から在番の部隊が十日に春日山を出発するとも告げている。

城の防衛体制

翌月の末、松倉城の守りを万全のものとするため、景勝はさらに次のような城捷⁽²³⁾を定めている。



写真3 松倉城中枢部の「実城」(主郭)

城捷とは、城の守備について在番の城将に宛てた注意や、管理のための捷書のことであるが、同時に日常の城郭の維持がどのように行われていたかを知る上で興味深いものがである。まず、この捷書に見える城内の区分について考えよう。一般に「実城」は本丸(主郭)、「中城」は二の丸、「外曲輪」はそれらの外側にある郭を指すが、松倉城(上杉氏時代)の場合、「実城」は山頂の東西二段から成る主郭を指し、「中城」は主郭下から大見城平の手前まで階段状に続く郭群、また北東の平ノ

五月廿八日

天正九年

右條々、堅申付、自然有我儘之儀者、急度注進可其沙汰者也

一

一 実城・中城江者、爰元より差越者共相移、其外之曲輪にハ地衆可差置事

一 外構之家屋鋪無理に不可取之事

付、地衆并地下人に至迄非分之儀申かけへからざる事

一 中城より内へ他国之者、不審成者不可入事

一 戸張之番、実城・中城之儀者爰元より罷越者共可致之候、外曲輪之

門番者、地衆可致之候、此方之者一兩人宛差添へき事

一 用心普請等、油断なく可致之事

捷

峰方向に連続して連なる郭群を指すのであろう。そして「外曲輪」とは大見城平の広い平坦面などにあたるとみられる。では、「外構」はどうであろうか。まず「外構之家屋鋪」「地衆并地下人」などの文言を見れば、地元(越中)の侍や住民の家・屋敷があることから、麓の城下を含むものであり、おそらく上の城戸(石の門)と下の城戸によって外部と画された、城下町地区を指すとみられる。

興味深いのは、第一条の守備の分担である。実城・中城は「爰元より差越者共」とあるので越後衆を入れ、その「外之曲輪」には地衆(地元)の越中衆を置くよう指示する。つまり、城の中核である実城・中城地区はあくまでも越後の者で固め、越中の者はその外側の郭に配置するとしたのである。

第二条では、城下町地区にある家・屋敷を無理に収用したり、越中衆や住民に道理に合わない非分なことを命じるのを禁じている。これは松倉城を守るためにあたり、土地の者を刺激して反感を持たせぬように、との意図であろう。越中において支城を維持していくためには、このような地元への配慮が必要だつたのである。逆に言えば、そのような建物の収用がよく行われていたからであろう。

第三条では、中城より内へ他国の者や不審な者を入れぬよう指示する。中枢部は城の命であるから、当然の安全対策であつたろう。

第四条は門番について定めたもので、やはり中枢部の実城・中城地区は越後衆に任せ、外曲輪の方は越中衆が担当するが、そこには越後の侍を一人か二人付けるよう指示している。

第五条は万一に備えた注意・警戒、不備な箇所の補修工事を怠らぬよう命じたものである。

この掲書から、松倉城が越後から来た上杉勢だけでなく、上杉方に属す越中の侍達と共に守られていたことがわかる。詳しく見ると、中枢部は越後勢でしつかりと固め、地元の者には外側を守らせるという分担であり、越中の侍達を余り信用せず、補助的に使つていたことも読み取れる。

松倉からの守兵撤収と魚津落城

天正十年三月に入ると、いよいよ織田方の攻勢が新川郡東部に向けて開始された。この戦いの実態については、魚津城関係の史料が多く残されている

ものの、松倉関係はほとんど見られない。このことは史料的な制約もあるが、主戦場は魚津城周辺であり、松倉では両軍共に積極的に動かず、持久戦を図ったとみるべきだろう。おそらく織田方は初期の段階で早月川右岸の升形山城(石の門)・水尾城の尾根筋を占拠し、奪取した升形山城や水尾城などに兵を配置すると共に、それらの間隙を埋める意味で升形山南一の砦・二の砦・三の砦・升形山南城などの付城群を構築し、これらの城砦群に拠りながら、角川を挟んで上杉方の松倉城と対峙する戦術を取つたのではないだろうか。つまり、天神山の景勝陣に対し、三重堀切の堅固な防御線を設け、専守防衛の持久戦を行つたのと同じ形である。

織田軍の松倉方面進出が遅くとも四月頃であつたことは、五月三日付の上杉景勝書状⁽²⁴⁾に、富山城から撤退した上杉方が、三月中に五箇山へ入つたことを述べた後、「以来柴田魚津・松倉表相撲、令張陣候」と記していることからもわかる。織田軍が包囲した魚津城を救援するため、景勝は越中に出陣し、天神山に着陣する。こうした中、信濃から織田方が越後へ侵入する事態が生じ、景勝は急ぎ天神山から兵を引き、越後へ撤退した。五月二十七日付の前田利家書状⁽²⁵⁾に「仍昨日廿六松倉明退、同夜子刻喜平次退散候」とあるとおり、まず二十六日に松倉から守兵が退き、続いて同日夜に景勝本陣の撤退が行われたのである。この結果、魚津城は六月三日に落城を遂げる。ところが、直後に本能寺の変の知らせが届いたことで織田方の勢力が一時後退し、上杉方が魚津城を奪回する。

しかし、翌十一年春、態勢を立て直した佐々成政の攻勢によつて、四月三日以前に守将の須田満親は成政と和を結んで越後へ退去している。

前田利家による松倉廃城指示

この間、松倉城が上杉方によつて使用された形跡はない。それは佐々氏も同様であり、天正十一年春の須田の魚津退去以後になつて、初めて佐々新右衛門が升形山城に入つたとみられる。このことは成政が魚津城の詰城として升形山城を選択したことを示すが、少数の兵ぐらはしばらく留めたかも知れない。成政は同十五年に肥後へ移るまで新川郡を領有するが、後に同郡を領有した前田利家は慶長年中、部将の武田宮内を置いたという。すなわち、『加能越三州地理志稿』によると、「慶長中置武田宮内。国祖巡

此地。令廢。移營升形山城」とあつて、その後当地を巡つた利家が松倉城を廃し、升形山に城を移したという。一方、『三州志』は利家がこの地を巡つた時期を「慶長の初め」とする。それは死去する前年の慶長三年(一五九八)のことであろう。この年、利家は湯治のため、上野の草津温泉に赴き、途中で新川郡を通っている。この時、魚津付近を通過した際の指示であろうか。正式にはこの時、利家の指示で升形山城への移転が命じられ、松倉城が廃城になつたとみられる。

註

- (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1) 『富史Ⅱ』二八一号。
『富史Ⅱ』二九三号。
『富史Ⅱ』四二五号。
『富史Ⅱ』四二八号。
『富史Ⅱ』一六一四号。
『金沢市史 資料編2』四九〇号。
『富史Ⅱ』二八一号。
『富史Ⅱ』一六八九号。
『富史Ⅱ』一六九九号。
『富史Ⅱ』一七〇八号。
高岡 徹 「戦国期における上杉氏の越中・在番体制とその展開——河田長親在番期を中心にして——」『金銀山史の研究』
『金沢市史 資料編5』。
『信長公記』。
『富史Ⅱ』一九二〇号。
『上史別2』一八三三号。
『富史Ⅱ』一八九四号。
『富史Ⅱ』一九六九号。
『御家中諸士略系譜』。

〔信長公記〕

〔上史別2〕二一一三号。
『覚上公御書集』。

〔上史別2〕二三七二号。
『富史Ⅲ』四〇号。

〔付記〕

一 本稿は平成二十四年十月、魚津市教育委員会より刊行された『魚津戦国紀行——城と文書が語る魚津の戦国史』中の「松倉城」を一部改変の上、全体を縮小して掲載したものである。詳細な記述は同書を参照されたい。

二 なお、註記に掲げた書名の略記は次の通り。

- ・『富山県史 史料編Ⅱ 中世』→『富史Ⅱ』
- ・『富山県史 史料編Ⅲ 近世上』→『富史Ⅲ』
- ・『上越市史 別編2 上杉氏文書集2』→『上史別2』

IV 松倉城跡の縄張

越中有数の山城である松倉城は、前章でも述べたように南北朝期以降、二時期にわたり形成されたとみられる。

〔古松倉城期〕

十四世紀前半の建武五年(一三三八)、守護普門(井上)俊清がたて籠もつてから十六世紀前半の椎名慶胤(戦国期の永正年間)までの時期にあたる。浜街道側から見て、ひときわ高くそびえる平ノ峰(標高四三〇m)が軍事的な要害として利用された。山頂部の主郭は四四×九mでさほど広くないが、南北両面に切岸と帶郭を配し、東西に長く張り出した尾根筋を多数の堀切(一部は堅堀となって下る)で切断する。その本数は計八本にも及び、いずれも規模が大きく、守りが堅い。ただし、縄張の基本が尾根筋に連続して設けた堀切主体であることから、要害性を重視した古い形を示している。

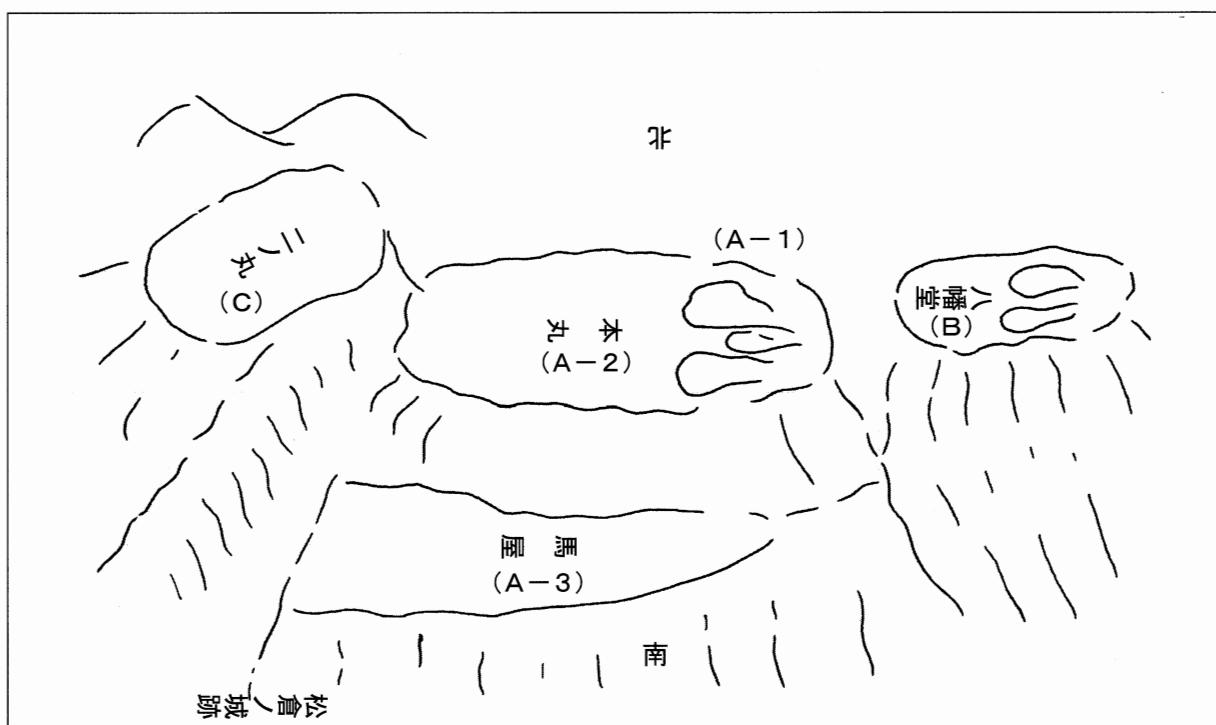
この城はその後の椎名長常・康胤期や上杉期には、尾根続きの新松倉城の支城として利用され、堀切・堅堀などが拡充・整備されたとみられる。

〔新松倉城期〕

永正十七年(一五二〇)の新庄合戦での敗北後、椎名氏は本拠を海岸の魚津から鹿熊集落背後の城山(標高四一八m)に移したと考えられる。現在の松倉城の位置である。戦乱による軍事的緊張の中、平地の魚津では守りに不安があり、政府の機能を持つ日常の居館なども伴う移転だったと考えられる。

当然、居住性を備える必要があり、従来の平ノ峰では無理があつたのである。しかし、椎名氏は康胤の代に武田信玄と結んで上杉氏に敵対したため、永禄十二年(一五六九)謙信に攻められ、敗れて松倉城を去った。その後松倉城は上杉氏の支城となり、謙信の部将河田長親などが在番して城を守った。上杉時代は天正十年(一五八二)まで続いたことから、現在見られる遺構と縄張の大部分はその時期のものとみてよい。

あえて現時点で当初の椎名期の縄張を考えるなら、現在の主郭(縄張図のA郭)から平ノ峰方向へ、尾根伝いに続く一連の郭群(C・D・E郭)が主体であつたと推測される。これら郭群の間は段差を伴う大規模な堀切で守られていて、かえつて各郭の独立性が高く、防御上の一體性に乏しいと言える。これに対し、上杉期には当城が越中支配の最大拠点となるため、越後から

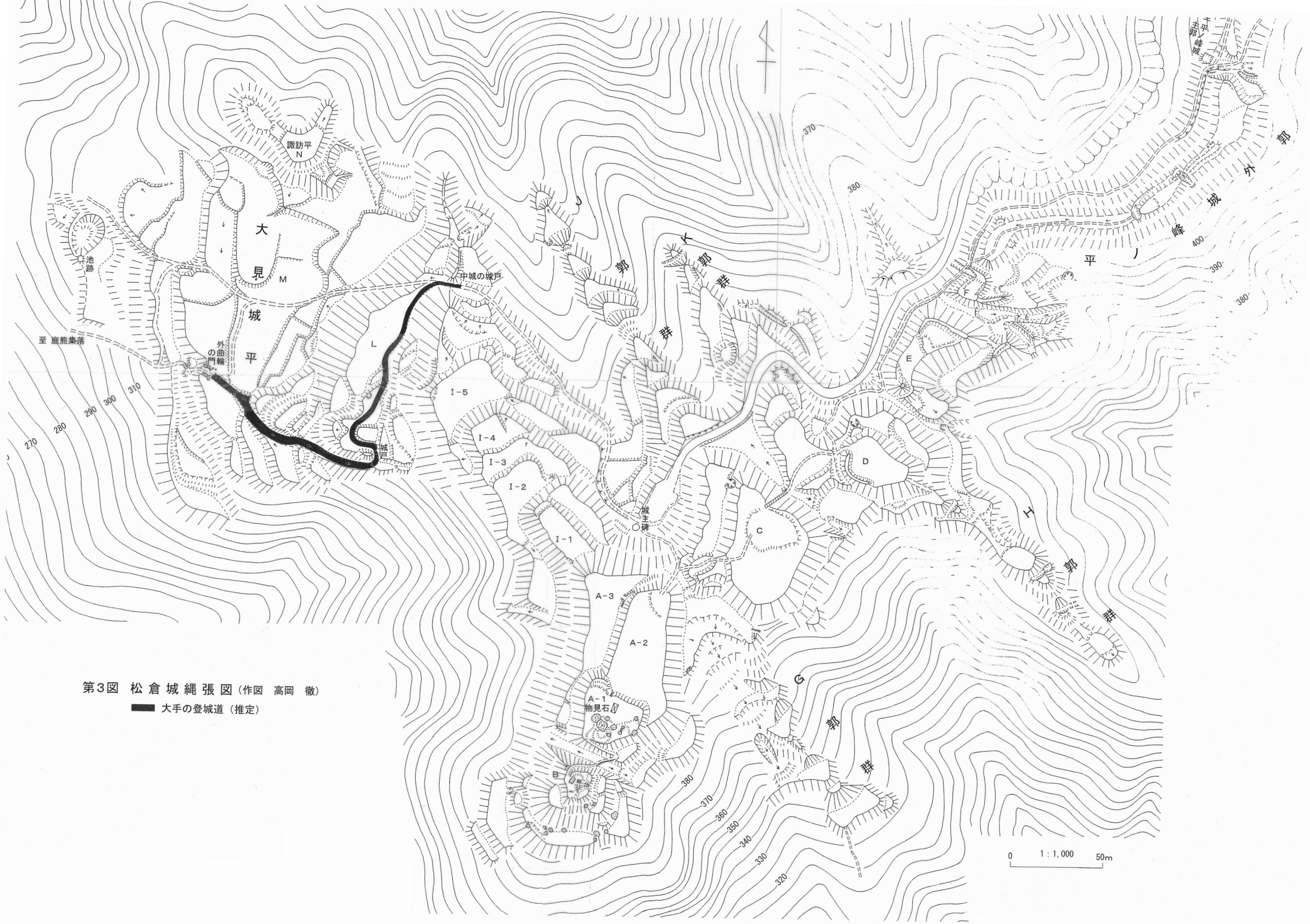


第2図 松倉城跡古図（金沢市立玉川図書館蔵「太平記評判抜書」付図をトレース。A-1等は縄張図の郭名）

の部将が多数在番する事態となり、兵員収容のためにも広いスペースが要求された。そうした将兵の駐屯スペースとして、主郭から北西方向へ下つた大見城平が利用され、主郭との間にIの郭群が階段状に連なる形で設けられた。現在、大見城平の西側に残る大きな窪地は、城内の水源用溜池の跡とも考えられよう。

上杉期の城内施設の構造を知る史料として、天正九年に上杉景勝が定めた捷書が残されている(Ⅲ章参照)。その中には実城・中城・外曲輪の区分が見出される。その各エリアを現在の遺構の位置や規模から想定してみると、「実城」は主郭を指すことから、A郭に該当し、これに守護神を祀る奥のB郭が付随しよう。また、「中城」はその外側のC・D・I郭を含む範囲となる。「中城」と「外曲輪」の間は地形的に一線が画される必要があり、その点を考慮した。そのように見ていくと、「外曲輪」は「中城」の外側に付随するエリアとみなせ、G・H・J・K・L・M・Nの郭群が該当することになる。この内、大見城平にあたるM郭はI郭側と大きな切岸で隔てられ、施設の性格が大きく異なる。

城下町側からの大手の登城道はまず大見城平の西南部に入る。この場所には自然の大石をいくつか据えて出入口の構えを作っている。ここに「外曲輪」の門があつたとみられる。そこからし郭内を通つた道はI郭北端部に設けられた土壘の開口部を抜けて「中城」側に入つている。城戸にふさわしい施設であり、ここに「中城」と「外曲輪」を画する城戸が存在したと考えられる。



第3図 松倉城縄張図 (作図 高岡 徹)

■ 大手の登城道 (推定)

V 平成二十五・二十六年度の調査

1 城下町の分布調査

松倉城跡の城下町については、位置や伝承等から松倉城跡麓の魚津市字鹿熊の角川両岸が指摘されていた。この鹿熊地区は、昭和五十年代の圃場整備によつて旧地形が大きく改変された。さらに工事中に遺物が採集されていたことなどから、ある程度、遺跡は削平されていると想定されていたが、平成十三～十六年にかけて鹿熊地区の数か所で遺跡の有無を確認する試掘調査が実施され、戦国時代の遺構や遺物が確認された。圃場整備時にどこまで遺跡が削平されたかは不明であるが、場所によつては遺跡が遺存していることが明らかになつたことは重要であった。

しかしながら、推定城下町とされる範囲において遺物の分布調査等、遺跡の有無を確認するための体系的な調査は行われていたなかった。そのため、この推定城下町とされる範囲において遺跡の有無を把握するために、平成二十五・二十六年度に遺物の分布調査を実施することとなつた。

調査の結果、対象範囲内において、約八〇箇所の採集地点と中世から近世にかけての遺物二〇〇点以上が採集されたほか、五輪塔（風輪1・水輪1）や宝篋印塔等の石造物も確認された（第4図）。中世の遺物は、土師器皿が最も多く、中国産の青磁や国産の瀬戸等の陶磁器類も確認されている。遺物の分布状況等から、今回の調査対象範囲内には、中世から近世にかけての遺跡の存在が確認された。周辺には松倉城跡のほか多くの支城や砦等が存在することから、松倉城跡の城下町であつた可能性が考えられる。

なお、これまで城下町の範囲の一つに、北端が金山谷地区と鹿熊地区の境あたり（孫三郎橋付近）、南の端が石の門砦から少し山を下つたあたりが推定されているが、遺物の分布状況は、北側は焼山砦付近までであり、これまでの想定範囲よりも狭いものであつた。これが元々の範囲であるのか圃場整備等の工事によるものなのかについては、今後も調査を行い、検討していくかなければならぬ課題である。

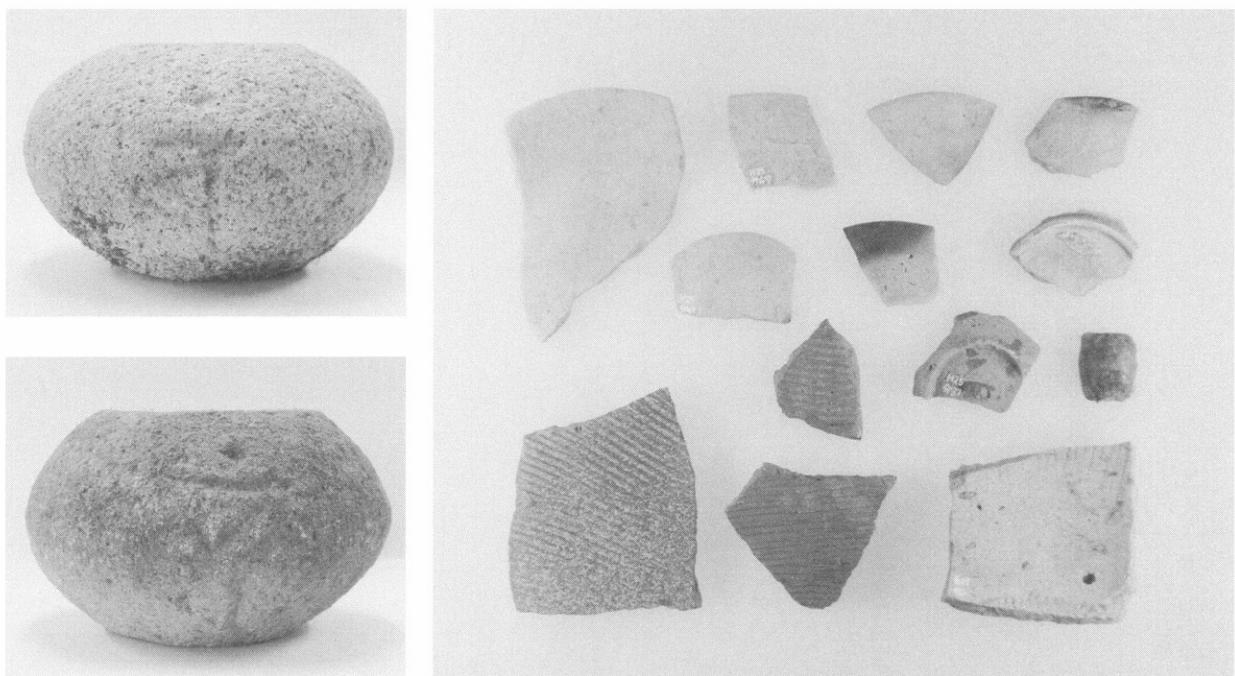
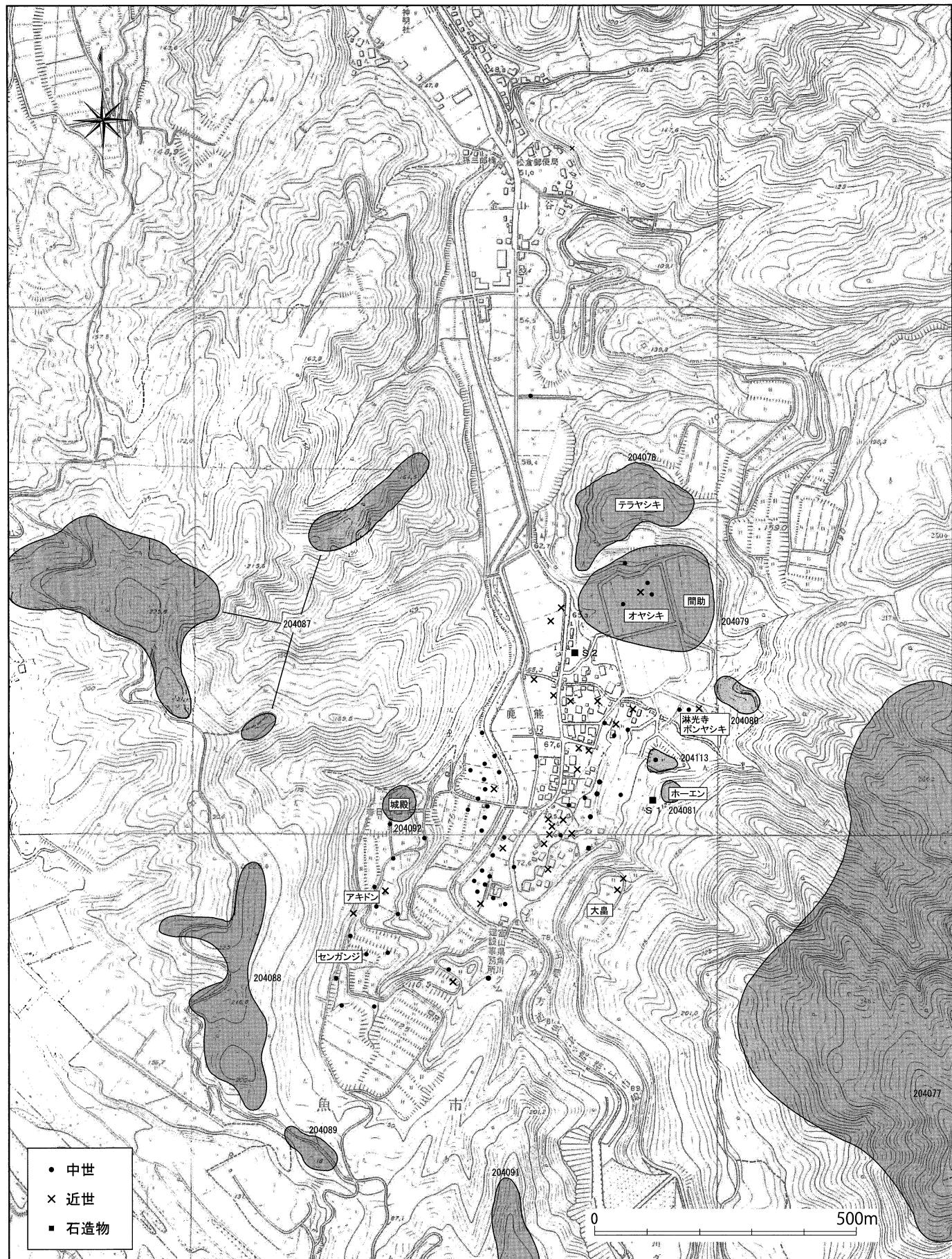


写真4 鹿熊地区分布調査の主な採集遺物(右) と室田テラヤシキ遺跡採集の水輪(左)



第4図 鹿熊地区の分布調査結果（縮尺 1/10,000）※ □は城に関連すると推定される地名等

204077 松倉城跡 204078 焼山砦 204079 鹿熊オヤシキ遺跡 204080 淋光寺遺跡 204081 鹿熊ホーエン遺跡
 204087 升方城跡 204088 南升方城跡 204089 石の門砦 204091 水尾城跡 204092 鹿熊城殿遺跡
 204113 鹿熊三枚田遺跡

2 地名調査

松倉城跡周辺における小字名や通称等を確認することを行うことを目的に行つた。小字名は、魚津市役所税務課に保管されている明治九年の地租改正地引絵図から抽出した。地租改地引絵図はその性格上、水田や畠を中心としており、山林となる松倉城跡範囲内にあたる城山や平山等の小字名は記されていない。また、地租改正地引絵図の他に、『魚津市史 史料編』（魚津市役所一九八二）、地元の歴史等について記した『十三の里』第十一号（松倉振興会一九九二）、「北陸の中世城郭」第五号（一九九五）等も参考に小字名や通称の抽出を行つた。なお、小字名や通称の読み方及び場所については、聞き取り調査で確認したものもある。

鹿熊地内の小字名（魚津市史 史料編掲載分）

地獄谷、地坂、西ノ番、水尾、中島、宝ノ上、間助、中坪、墨川割、前田割、向割、城殿、曲戸、鳥越割、中割、淋光寺、平塚割、大平割、大畠（畠）、大見城、城割、川入割、大川割、宝蔵野、焼谷、滝谷、中ノ堂、川浦、長谷、焼錐、雨池、平山、城山、浦谷、石門、板鶴平、大平、小谷、板鶴、小柴、大柴山、立岩、木落、用水下

鹿熊地内の通称

テラヤシキ、シチノウエ、トウエン、オヤシキ、オオヌマ、ニンゲンタン、イシザカタン、ボンヤシキ、フカタン、ホーエン、上（ベイ）、コバエ、コバエ谷、ホウズキ谷、ヨカンド、ツタタン、ヨウカイ、テンゴウダキ、アキドン、センガンジ、フドウ等

右記の小字名・通称をみると、城殿、大見城、城山、城割、間助（人名か）、オヤシキ、ボンヤシキ、アキドン、淋光寺、テラヤシキ等の城や居館、寺院を連想させる名称を確認することができる。およその場所がわかるものについては図示した（第4図）。松倉城跡の範囲内には大見城や城山の小字名が、このほかの名称については主に現在の鹿熊集落周辺で確認できる。圃場整備前の昭和五十年に撮影された鹿熊地区一帯の航空写真（国土地理院）と比較すると、城殿、大畠（畠）、淋光寺やテラヤシキ等の場所は、やや広めの田畠

であったことが確認でき、一定程度の平坦面があつたと考えられる。また、城殿やホーエンには今も土壘の一部が残り、オヤシキでは圃場整備時に遺物が採集されており、居館や寺院跡であつた可能性がかねてより指摘されている場所である。

このほか石門については、滑川側から早月川を渡つて鹿熊地区へ至る玄関口と想定されている石の門砦付近の場所である。石の門砦は、現在でも自然石を五から六段積んだ、高さ二から三mの石垣が残る（写真6）。

(1) 近世の史料に見る松倉城跡とその周辺

——俳人・旅人・役人の探訪記を中心に——

一 はじめに

松倉城や城下町が存在した頃から数百年の時が流れ、今は当時の限られた史料や、地上に残存する遺構から、城の規模や構造を窺うしかない。そうしたなか、廃城後の近世になつて何人の人々が城跡周辺を訪れたことが知られる。そして、ある者はそこで見聞したことを書き留め、幸いにもその史料が今日まで残された。ここに紹介する三点の史料は数こそ少ないものの、まだ遺構が比較的よく残っていた頃の状況を記しており、今後城跡やその周辺の遺構を調査・研究する上で貴重な情報を伝えてくれるものである。その内容は、城郭研究が同時代史料のみで片付けられないことを物語っている。以下、順次史料を掲げ、解説を加えたい。

二 俳人の探訪記から——文化九年(一八二二)八月

『鹿熊古城の記』

近世の越中では俳諧が盛んであり、各地に俳人のグループが存在した。ここに掲げる史料は、滑川の青雲亭立山らの俳人達が案内人を付けて松倉(鹿熊)城跡を訪れた際の探訪記の一部である。

越中の国槻月川の水上松倉の庄に古城有、昔年椎名右衛門尉居城になむ。今は鹿熊の古城と聞へける。天正四年の春の比、上杉発向の矢の羽にあたし、後子住河田豊前守いふ人も織田勢ともまれて、終てはかなく、寔に始あるものは終あるの習ひに、屢々、魂を削る。我此峯に俳諧の握飯をしてふ乞事年ありて時なし。さるを此文化九玄黙浦灘中秋の比、杖を探て笠打着せ、先達となる子二人、三人はた城跡に木樵る翁の案内に連れて槻月川の邊りに至る。さすか名におふ早瀬なれハ岩崎に堰連、石転して耳を貢る。漸々、川むかふに押渡れハ、^春捕出舛方山の跡闇く、道は東西にゆかみ、木立ものふりて峯六ツ、五ツ星翼に並ひ、千草夕日を孕ミ、春秋の露霜に染

乱て鎧ふたるかことく、陥岨十余丁山藤岩根をからミ、筍満て草の道しるべ、壁を筋違に石の門といふ處にのほり、一たひハ汗をぬくひ、一たひは櫻子を開き、小竹筒の酒を吸ふて生涯の笑となる。左右下高こたかく石を疊ミ、苔に埋ミてかたはかり残れり。或は不動坂、鳥越などと言へる踏ミニえて、行衛覚束なく、誰呼子鳥、松枝に鳴すかり、秋風嘯々として涙巷に落す。本陣杏に雲を臨り。渓間霧かくれに鹿熊辺人家菊水に構ひ、軒端百余り、よき程に家道は十往に跨る。田畠ここに開き、かしこに芸り。谷川南北に流れ、果は魚津邑の古城に失ひ、今角川と云り。懷廣くあるハ寺ありて帷有。淨土の果報に臨む。此禁より二十有余丁、良異に峙、たまほこの小道、猿すへりの羊腸として八相に下り、四ツ折に登り、かけろふ芝原に焦て、岩つた之葛すへにすかり、往来ふ人の爪先を破る。半途優せず傾きて、大畠、姫ヶ谷、月見の丘、花懸、井戸ヶ平、城神諏訪明神の立せ玉ふ御跡、連歌林、下乗松、香ひヶ原、釣殿、一の木戸、二の木戸、局屋舗、道山畠、泉坪、あるハ御藏屋舗など云あり。いつれも百歩、武百歩に別れ、前後山賤の鋤の刃に掘崩し、黍、栗、芋、大根の葎となりぬ。猶、本丸に分入て、頗る汝南碧龍などの床をあやしむ。鳩鶴の翅サたゆミ、唯人しらてふるき鈴虫、尾花か髪のすえ解て、兵共か夢の跡、古き戦場のならひに迫、其悌の心惑ひに、鑓ミの声、あやまきの音などいつ日ともなく小雨山風の梢に送り、麓の郷の枕に通ひて長き夜寒の夢をそこなふ。嶺の鎮守八幡神殿の御跡、茫々として白和幣のまかたまハ宮津の里に遷し奉り、礎遠地近地に蓬生、野菊の花咲て虫のすたく栖となれり。御殿跡てふ真中に物見の石辻三ツ、四ツ拾たり。石上碁盤を居へ琴を鳴す程間はありて、此上に這のぼり十干の巖窟、切レ谷の逞しさを見おろせハ、白雲林木に湧のほり、山川の底の闇にハ、原の蕨の葉裏におとつれ、甍崩れさかり雨にほろ／＼沙をこほす。破鏡二たひあわす、城春にして草木深し、涙心に盈て眼前に餘す。卯辰に金山跡、洞口谷といふあり。酉戌には歸銀山といふあり。

今回紹介する史料の中では最も古く、十九世紀初めの文化九年八月の探訪記である。青雲亭立山なる人物の詳細は不明だが、松倉城跡は滑川からでもよく遠望でき、また、戦国の古城跡としては著名だつたとみられる。一行は滑川を出て、まず舛方(升形)山城跡の見える所で早月川を歩いて渡つてゐる。

おそらく古図に記す杉本から同川を渡河するルートであろう。

一行は鹿熊の手前の尾根筋を越えるためジグザグの道を登り、「石の門」に着く。左右に高く石を積んでおり、壁を筋違にしているとの印象を記す。注目されるのは、現在の通称「石の門」が、すでにこの時期に使われていることである。このことは「石の門」という呼び方が、江戸時代後期には地元ですでに定着していたことを物語っている。なお、現在のところ、当史料が「石の門」の呼称を確認できる最も古のものである。呼称の由来はおそらく、「石でできた門」だつたとみられ、ここを松倉の城下町地区へ出入りする「門」として認識し、後世に伝承していた可能性が高い。一行はここで竹筒の酒を飲んで一服したのち、不動坂、鳥越という所を経て鹿熊の集落へと向かう。



写真5 早月川左岸(滑川側)から見た松倉城跡。手前の尾根筋の低い所(中央)に「石の門」がある

麓から山上の城跡へ登る道の途中には、大畠、姫ヶ谷、月見の丘、花懸、井戸ヶ平、城神諏訪明神、連歌林、下乗松、香ヶ原、釣殿、一の木戸、二の木戸、局屋鋪、道山畠、泉坪、御蔵屋鋪と呼ばれる所があるという。の中には城郭に関わる地名もいくつか見出せ、興味深いが、現在不明のものが多く、詳しく述べる所がないのは残念である。

この内、「城神」の「諏訪明神」とあるのは、現在、「大見城平」の北側に小高くなつた「諏訪平」を指すのであろう。当探訪記によれば、城の守護神である諏訪明神を祀っていた場所のようである。これとは別に、山上には「嶺の鎮守」として「八幡神殿」の跡がある



写真6 「石の門」の石垣

と記す。そこは現在、本丸南側の巨大な堀切で隔てられた一郭にあたり、今も祠が建っている。文政元年(一八一八)の書上申帳にはここを「八幡屋敷」と記し、『越中古城記』所収の『太平記評判抜書』には「八幡堂」と記している。ここも古来、城内の神聖な場所だつたことがわかる。

次に「御殿跡」の真ん中にある「物見の石」について触れている。石の上は碁盤を据えて琴を鳴らすくらいの広さがあるという。これは本丸内南側の小高くなつた所に聳える大石を指す。この大石は城跡を訪れた者なら必ず興味を示す物であり、この時は俳人らも石の上に這い登り、周囲の眺望を楽しんだ様子がわかる。ちなみに城跡を訪れた青雲亭立山が詠んだ句は「古城や動ぐものミな秋の声」である。

三 旅人の探訪記から——天保十三年(一八四二)八月 『五ヶ山大牧入湯道之記』

天保十一年から同十四年にかけての道中記で、以前、史料を紹介された橋本龍也氏は作者を加賀の金石(宮腰)あたりに居住した商家の隠居身分と推定している。以下に掲げるのは、この内、天保十三年八月(青雲亭立山の探訪から三十年後に)魚津などを訪れた折の箇所である。

魚津町、三日市ち二り。廿五日泊。宿 小川ヤ傳四郎。

天神山、魚津ノ東北一リ。片貝川ノ南ニ有。往還ち半リ。此山往古ち魚津城責ノ節、寄手本陣ノ場所ニ取タル也。麓上二天満宮御社有。

住吉村、魚津ち八丁。此所ノ北、田ノ中ニ、青山佐渡守墓有。又北側ニ塚壹ツ。臣下ノ塚ト云。塚上松四、五本有。

井手村、井ノ上村。此間ニテ角川北へ流ル。長板ノ橋。角川ハ魚津町ノ中英へ出ル。往古橋有。獵船多ク入。

金山谷村、此所ノ西ニ追分有。右ノ道也。左リハ別山村有。

鹿熊村、魚津ち二リ。金山谷ち東、左右山ニテ谷間ナリ。東ノ山本、城ノ跡、村ら半リ。又村ノ南ニカド川流ル。其南山上ニ大手門跡有。峯ヲ切通シ、高サ二間斗、左右石垣有。此城ハ角川ヲ内堀トシ、早楓川ヲ外堀ニ構タル城也。要害ヨキ山城也。又此村ノ東山ヨリ切石ヲ出ス。井筒垣石、地覆石等出斯也。色鼠ニテ、石性堅カラズ。又此所ヲ町鹿熊ト云。是ヨリニリ東奥ニ古鹿熊村ト云有。此所往古銀山有テ掘出シケルガ、今其屋敷田地ト成、小々高有。又是ち半リ東奥松倉村ナリ。

深山故炭ヲ焼、魚津へ賣出ス。又蕨、枸輩等性ヨシ。鹿熊大手門ヨリ南へ打越、早楓川へ出、歩渡リシテ川下へ行。杉本村、鹿熊ち一リヨ。二ツ塚村、鹿熊村ち二リヨ。此所南口ニ塚ニツ有テ、松古木一本宛有。由來分ラ子共、村名是ヨリ起ル。鹿熊城主有シ節ノ古墳ト云。

野町村、柳原村、滑川駅、鹿熊ち三リ。



写真7 主郭南側にある「八幡堂」(手前は大堀切)

作者は八月二十五日、魚津の町中で宿泊し、翌日はまず天神山を訪れている。「此山往古ち魚津城責ノ節、寄手本陣ノ場所

二取タル也」と記すが、正しくは魚津城救援の軍の本陣であり、作者の誤聞であろう。その後、魚津の町に戻り、町はずれの南にある住吉村で魚津城主だつた青山佐渡守の墓に立ち寄っている。この墓は現在、天神山の中腹に移設されている。そこから角川に沿つて井手(出)村、井ノ上(湯ノ上)村、金山谷村を経て鹿熊村に着く。

松倉城跡へは村から半里の道程と聞いたようだが、登らずに角川を渡つて南の山上に向かっている。鹿熊村から魚津の町へ戻らずに滑川へ向かう道を選んだのである。山上で「大手門跡」を見ている。言うまでもなく、「石の門」のことである。この時は「石の門」という呼び名を教える者がいなかつたのであろうか。だが、ここを松倉城の正門にあたる「大手門跡」であることは地元で聞いたようだ。とすれば、十九世紀半ばには地元でそのように伝承されていたことになり、注目される。続いて門跡の様子を「峯ヲ切通シ、高サ二間斗、左右石垣有」と記し、その構造を正確に描写している。



写真8 近代魚津城の城主青山佐渡守父子の墓
(現在は天神山中腹に移設。左が初代青山佐渡守)

さらに松倉城の構えにも触れ、「此城ハ角川ヲ内堀トシ、早楓川ヲ外堀ニ構タル城也」と、角川・早月川が内外二重の堀になつてゐるとし、「要害ヨキ山城也」と結論付けている。城郭に關しても興味があつたと見え、それなりの知識を備えた人物のようである。何らかの書物で読んだ知識なのか、地元で聞いた話なのか、どちらかは不明である。それはともかく、石の門を「大手門」、二つの川を「内堀」・「外堀」とみなすのは、松倉城が西方に對して築かれたとする、当時の人々

の一般的な考え方を示すようであり、興味深いものがある。

なお、鹿熊村では城跡以外にいろいろ聞いたと見え、東の山より石を切り出すこと、奥の古

鹿熊村に以前銀山があつたことなどを書き留めている。さて、「大手門」を越えると、早楓（早月）川に出てそこを歩いて渡り、川下の杉本村、二ツ塚村を通り、滑川に着いている。このルートは青雲亭立山らが松倉城跡へ向かう際に通つた道筋であろう。



写真9 滑川市二塚の塚跡。左手に松の根が残る

二ツ塚村の南口には塚が二つあつて、それぞれ松の古木があると記す。塚が村名の起こりになつたと言い、「鹿熊城主有シ節ノ古墳」であるとの伝承を書き留めている。この塚は今も残つているが、松は失われている。「北加積村誌稿」（『滑川市史』通史編）によると、天正年間、謙信が松倉城を攻略した時、椎名の郎党が逃げ延びる途中、ここで亡くなつたのを村人が葬り、二つの塚を築いたものだという。この話は古来、当地に松倉城と滑川を結ぶルートが存在したことを見語ついていて、興味深い。

四 役人の探訪記から——安政五年(一八五八)五月 『魚津在住御用方日記』

加賀藩の役人が天保五年五月四日、升形山城跡や松倉城跡を探訪したことを見した日記である。前掲の加賀の旅人が訪れてから十六年後にあたる。日記を記したのは、加賀藩士で禄高二千五百石、人持組に属した成瀬正居であ

る。文政十一年(一八二八)生まれで、安政元年(一八五四)に家督相続し、定火消役、壯猶館御用主附、小松御城番、魚津在住、越中泊在番、寺社奉行、御近習御用などの役職を歴任している。天保五年はちょうど魚津在住の時代にあたる。

一、九時過より鹿熊迄歩出る、住吉村邊より鉢村之者升形を通り在所へ行と云者有之、此者先へ立テ川縁通より浅生通、升形へ着、此村山之直キ根也、家十斗有、魚津一里半と在所之者云、有山のあちら升形之手前、草山の岨ニ道附有、早月川へ左のミ間なし、圖之西ニ而ハ少ト山のき居る様也、村ニ而城跡へ之案内者雇し廻、肝煎之由ニ而太左衛門と云ぢい出来り、是を連て上りしニ、わつか斗上りて是か大手と云、二之丸と云所ハ石垣少々残居、堀之跡も有、井戸もニツ有、一ツハ水有、深しと云、本丸へ上りしニ、諸方見ゆ、本丸ハ三百六十坪也と太左衛門云、三州志ニ有通りニ本丸ハ廿間二十五間も有へきか、坪口ニ合セハ本丸ニ井戸跡有、水有無如何、草深き故見にくし、少ト踏込そふニ而危きもの也、東南之方軟、山へもつゞくか、西北之方軟、谷之様也、はきとハわからず、早月川ハ南之方ニ見ヘ、角川ハ東之方ニ見ゆる、生地崎ハ北之方ニ當り、岩瀬先ハ西ニ當ル、魚津ハ亥之方ニ當る、さへた日は能州三崎もよく見ゆるよし成共、今日ハ海之表もや立、見へにくし、され共魚津ハ遠目鏡ニ見しニ家も土蔵はよく見へ、人も見ゆ、又又水橋川之尻海へ出る所も赤く見ゆる、目鏡ニ而見しニ舟の内之人も見ゆる、ニ之丸ハ腰曲輪之様ニ而、細く長く三州志の間よりハ長き也、

一、是より太左衛門先へ立、此處を下るに又ニ之丸ニ石垣跡有、夫より常往来へ出、鹿熊村へ至りしか此間けわしき道ニ而真下り半道と云共、夫より近きやう也、鹿熊村ニ而角川橋を渡り此村肝煎は木下七郎兵衛と云者之庭ニ入、休ミ、鹿熊之城跡へ之案内者を尋しニ、おとな百姓九郎右衛門と云者出来り、是を連て上りしニ、大凡本丸迄八十丁斗も有之か、急成上り也、中段ニ所々平地少宛有て、田畠ニ成居る所ニ八屋敷跡と云、本丸へ上りしニ、是ハ余程高き故所々見



写真10 升形山城主郭一段下の井戸跡

ゆる也、俱利加羅もさへれハ見ゆる由也、此処ニ至り比ハ弥ましもや深く見にくし、富山の方より入膳之手前迄にも見ゆるか、はきとハ見にくし、黒部川ハ長き間見ゆる、新濱と云は慥ニ見ゆる、先此あたり迄か目鏡もきかぬ故、はきとハ六ヶ敷、焼野ハ申之方、岩瀬崎ハ西之方、生地崎ハ北之方、新濱ハ亥之方ニ當る、升形城跡ハ丑戌之間、魚津ハ戌亥之方ニ當る、本丸ニ大なる石二ツ有、其上へ上り見ればよく見ゆる、物見之石と云、所の者云、幅ハ三州志ニ有通り十六間も有之か、長サハ四十間余斗ニ見ゆる、間打不申故慥ニ八記かたし、南東西三方切岸也、一方のミニ之丸へつゝく、本丸ニ井戸跡有、水ハ見へぬ様也、芦生有、御郡圖ニ此ニツ之城跡記無し、依而此物見石之上へ貫左衛門と二人上りて九郎右衛門も上り、各方角を見定、鹿熊之城跡も升形之城跡もしるし候也、南方共、早月川ハ海際迄眼下ニよく見ゆる、鹿熊之石之門と云はあれ也と山の道を教へしかとも、はきとハわからず、扱こゝを下りて又、七郎兵衛方ニ休ミ、金山谷、宮津通、夜六半時比に帰る、山谷辺ニ角川田地用水へセキ入る所、少ト深く相成、鮎たまり居る所も有しか共、針を下るいとまもなし

当日の九つ(午前十二時)過ぎ、正居は徒歩で鹿熊へと向かった。住吉村、川縁村を経て魚津より一里半の升形村に着き、同村の城跡升形山城跡への案内を肝煎の太左衛門という老人に頼んでいる。村から少し登った所に「大手」があり、「二之丸」という所

や深く見にくし、富山の方より入膳之手前迄にも見ゆるか、はきとハ見にくし、黒部川ハ長き間見ゆる、新濱と云は慥ニ見ゆる、先此あたり迄か目鏡もきかぬ故、はきとハ六ヶ敷、焼野ハ申之方、岩瀬崎ハ西之方、生地崎ハ北之方、新濱ハ亥之方ニ當る、升形城跡ハ丑戌之間、魚津ハ戌亥之方ニ當る、本丸ニ大なる石二ツ有、其上へ上り見ればよく見ゆる、物見之石と云、所の者云、幅ハ三州志ニ有通り十六間も有之か、長サハ四十間余斗ニ見ゆる、間打不申故慥ニ八記かたし、南東西三方切岸也、一方のミニ之丸へつゝく、本丸ニ井戸跡有、水ハ見へぬ様也、芦生有、御郡圖ニ此ニツ之城跡記無し、依而此物見石之上へ貫左衛門と二人上りて九郎右衛門も上り、各方角を見定、鹿熊之城跡も升形之城跡もしるし候也、南方共、早月川ハ海際迄眼下ニよく見ゆる、鹿熊之石之門と云はあれ也と山の道を教へしかとも、はきとハわからず、扱こゝを下りて又、七郎兵衛方ニ休ミ、金山谷、宮津通、夜六半時比に帰る、山谷辺ニ角川田地用水へセキ入る所、少ト深く相成、鮎たまり居る所も有しか共、針を下るいとまもなし

は石垣が少し残っていると記す。これは山頂から一段下の平坦面(『魚津戦国紀行』所収繩張図のC郭にあたる)入口付近の石垣を指すのであろう。すれば、当時は地元でB・Cの二郭を合せて「二之丸」跡と伝えていたことになる。そして堀跡のほか井戸跡が二つあり、その内一つは水があるという。この井戸跡は山頂一段下(繩張図のB郭)に現在も残る窪みであろう。

続いて上の「本丸」(繩張図のA郭)に登り、望遠鏡を使い、周囲の眺望を確認している。ここで太左衛門は本丸の広さが三百六十坪あると述べている。一方、正居は規模を『三州志』の記すように二十間に二十五間はあるようだとしている。この時期の加賀藩士が、古城跡に関する資料として『越賀三州志』故墟考の内容を参照している点は興味深い。正居はまた、本丸にも井戸跡があるが、草深いため、水の有無は確認できないとしている。この井戸跡の場所は、現在はつきりしない。

それより太左衛門の案内で本丸を下り、また「二之丸」(繩張図のB郭)に出る。正居はこの郭を「腰曲輪」のように細く長いと表現し、『三州志』記載の数値より長いと記す。ここでも『三州志』を参照しているが、本丸の下をぐるりと巡る形の郭であることから、そのような印象を持つたと考えられる。そしてここでも石垣跡があると記すが、これは本丸の南東隅から下りた所にある土塁内側の石垣を指すのであろう。



写真11 升形山～鹿熊を結んだ古道の跡

さて、升形山をあとにした一行はそれより「常往来」に出て鹿熊村へ向かう。B郭から南側に下ると、尾根筋を切る堀切があり、その堀底から東側に一段下ると、中腹を通る道跡が今も残る。これが正居の記した升形村と鹿熊村を結んだ日常の往来の道だったのであろう。一行は途中が「けわ

しき道」を真っ直ぐに下つて角川の橋を渡り、鹿熊村に着いた。ここに記された升形山城跡からの道筋は戦前の地形図に破線で記されたものであろう。尾根筋の東側の斜面をたどるもので、現在は一部に道形が残るものの、斜面の急な所は過去に崩落して失われている。

正居はここで肝煎の木下七郎兵衛宅の庭に入つて休み、おとな百姓の九郎右衛門を「鹿熊之城跡」への案内人として頼んでいる。途中は急な登りで「本丸」までは十丁（約一キロ余り）位の距離だとしている。中腹にはあちこちに平地が少しづつあり、田畠になつた所は「屋敷跡」であると聞かされている。山上の「本丸」はその高さから周囲の眺望に優れ、澄んだ日は俱利伽羅も見えるという。

かつての青雲亭立山と同様、正居も「本丸」にある大石に興味を示し、上に登つて見晴らしの良さを確認し、この石が「物見之石」と呼ばれるることを記している。四十六年前の立山もそのように記すことから、地元では定着した呼称だったことがわかる。

本丸の規模について正居は「幅は『三州志』にあるとおり、十六間はあるようだ」とし、「長さは測つてみないの



写真12 成瀬正居らが登った主郭の大石「物見石」

で確かにないが、四十間余りほどのようだ」と記す。正居があえてそう推測したのは、わけがある。実は『三州志』には本丸の幅だけで、なぜか長さの記載がないのである。続いて本丸の立地について、南・東・西の三方が切岸で、北側だけが「二之丸」に続いていると記す。このことは当時も、北東の平ノ峰城へ続く側の郭が二の丸、三の丸と伝えられていたことを物語

る。また、正居は本丸に「井戸跡」があり、水は見えないが、芦生えはあると記す。その「井戸跡」は、本丸一段下の登り口にあつた井戸を指すのかも知れない。そこは以前、城主碑が建つたために埋められてしまった。残念なことである。

なお、正居によれば、「御郡図」には升形と鹿熊の二つの城跡が記入していないとし、「物見石」の上に貫左衛門と二人で登り、さらに案内の九郎右衛門も登つて、方角を見定め、どちらの城跡も記入したという。貫左衛門とは同行した従者であろうか。おそらく日頃使つていた新川郡の郡絵図を持参していたのであろう。この時、九郎右衛門が鹿熊の「石之門」というのはあれでござります」と指し示したようだが、よくわからなかつたとある。その後、山上から下り、再び木下七郎兵衛宅で休んだ後、金山谷、宮津を経て帰つたといふ。

わずか半日ではあるが、正居は魚津の内陸にある主要な二か所の城跡を巡視し、繩張や規模などを『三州志』の記載と参照しながら確かめている。また、山頂の本丸からの眺望にも細かく気を配つてゐる。このことから、正居の巡視には幕末の外国船に対する海防を念頭に、万一日の軍事拠点としての利用も検討する意図があつたと考えられる。

五 おわりに

これまで本県では、中世城郭の調査研究にあたり、近世の古城跡書上類を利用することはあつても、このような旅人らの探訪記を本格的に利用した例はほとんど見られない。今回はたまたま、目に触れた史料が複数あつたことから、取り上げてみた。従来の書上類と違い、臨場感があつて城跡の様子が生き生きと感じ取れる点は有難かつた。また、地元の村人から聞いた伝承や地名など、今日では得難い情報が盛り込まれており、貴重な史料であると感じた。当時残つていた遺構の様子にも注目すべき点が多く、今後の松倉城郭群研究にも大いに活用が期待されるものである。

末尾ながら、青雲亭立山と成瀬正居の史料を筆者に紹介された紙谷信雄氏、三点の史料の翻刻文作成などに協力いただいた浦田正吉氏に感謝の意を表したい。

(2) 北山城を守った神保右衛門

一 はじめに

北山城は松倉城の北方に築かれた山城(標高三〇九m)である。東麓に北山集落があり、松倉城側とは小盆地を挟んで相対する位置にある。実はこの城は江戸時代以来、近接する「金山谷城」と混同されること多かつた。その理由は両者が尾根続きの上、北山城跡付近で西の金山谷と北山の村境が接していたからである。だが、古城跡書上類の内、『越中古城記』や『越中古跡粗記』⁽¹⁾は「北山古城跡」と「金山谷古城跡」を明確に別立てして記載する。書かれた内容を子細に検討すれば、北山城は現在の北山集落の中間の山上、また金山谷城は現在の金山谷集落と北山城の中間の山上(稗畠の小字「後藤城」付近)に存在したことが明らかである。

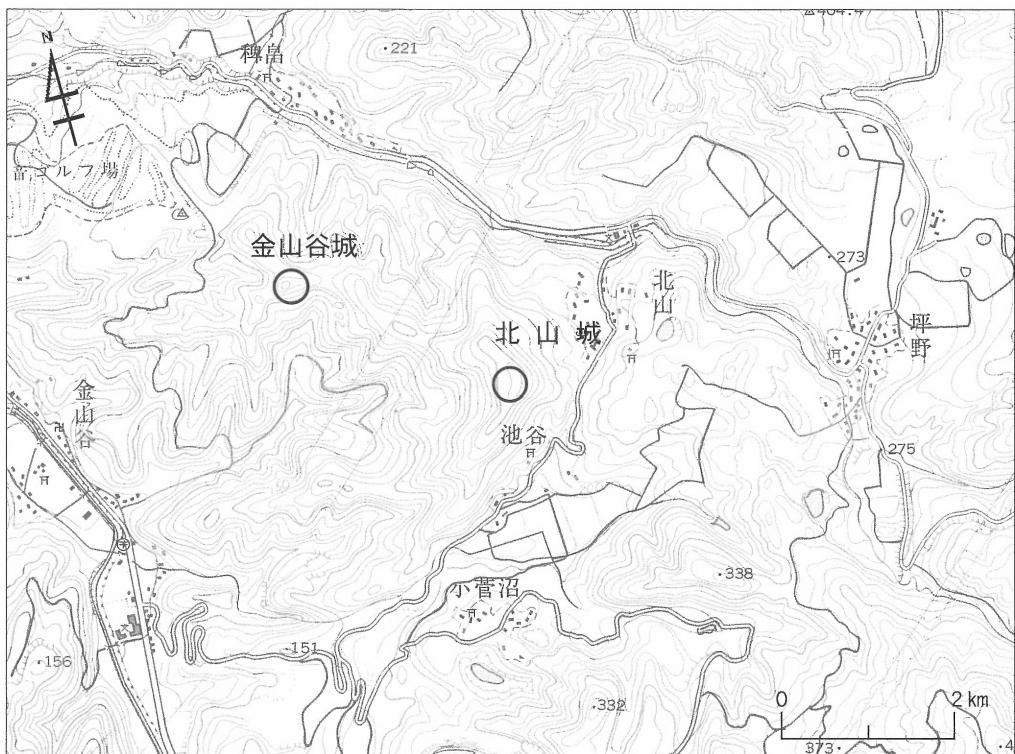
ただ、城郭遺構として両城を比べると、北山城の方が標高も高く、かつ遺構自体も規模が大きいことから、金山谷城は北山城の出城だつたとみてよい

⁽²⁾。こうした状況を反映して、江戸時代以来、なぜか北山城の方を

金山谷城とみなし、一般には北山城の名称がほとんど使われなかつたようである。たとえば、城跡を多く記載する江戸時代の『加越能三州細密絵図』⁽³⁾でも、北山城のある山上に城跡の記号を書き入れ、「金山谷古城」の名を付している。この混同問題はすでに『魚津戦国紀行』でも記したので、参考されたい。

写真13 北山城跡遠望（坪野地内より）

冒頭からややこしい両城の混同問題を述べたのは、今回、北山城の城主として從来知されることのなかつた武将を取り上げ、紹介するためである。



第5図 北山城と金山谷城の位置関係（縮尺 1/25,000）

二 加賀藩士の由緒帳から

北山城は松倉城の主要な支城の一つとして知られるが、その城主としては従来、椎名小八郎の名が『越中古城記』などに伝承として挙げられている。

椎名小八郎の詳細は不詳だが、おそらく永禄年間（一五五八～七〇）に椎名康胤の養子として上杉謙信から送り込まれた長尾小四郎景直にあたるとみられる。その「小四郎」を後世の人が「小八郎」と誤伝したものであろう。椎名小四郎は謙信没後に織田方に転じたようであり、天正七年（一五七九）六月以前に上杉景勝から越後の本領を没収されている⁽⁴⁾。当然、上杉方から離反した時点で北山城から出ていたことになる。

今回、新たに知られた城主の名は神保右衛門（実名不詳）である。その名は加賀藩士の由緒帳の中に見出される。無論、由緒帳は後世記されたものであり、利用にあたっては慎重を期さねばならないが、松倉城郭群に関わる、隠された事実の一つとして取り上げる意義があると思われる。

明治三年（一八七〇）に書き上げられた加賀藩士神保權五郎成之（五五〇石）の『先祖由緒一類附』（以下、「由緒帳と呼ぶ」⁽⁵⁾）を次に掲げる。その初代右衛門は次のように記されている。

一 八世之祖父

神保故右衛門実名相知不申候

越中富山之城主神保越中守弟ニ而、同国金山谷城罷在候処、信長公御生害之後、越中守兩人共浪人仕、右衛門儀ハ越後上杉様ニ仕罷在候処、上杉様御領分相減候後浪人仕、山形出羽守様ニ暫罷在候処、其以後暇申請微妙院様ラ元和三年松平伯耆を以被 召出當座之為御扶持方六百俵被下之、御持筒足輕五拾人御預相勤罷在候処、同年八月五日病死仕候

この中に記す戦国末の富山城主「神保越中守」と言えば、射水・婦負二郡の守護代を務めた神保宗家筋の「神保越中守長住」を指すとみてよい。今回取り上げる神保右衛門は、その弟だという。前掲由緒帳によれば、その右衛門が金山谷の城にいたが、本能寺の変で信長が死去後、兄弟共に浪人となり、右衛門の方は越後上杉家に仕えた。しかし、上杉家の所領削減により、山形の最上出羽守（義光）にしばらく仕えたが、後に同家を去り、元和三年加賀の

前田利常（微妙院）に仕えたという。この時、当座の扶持として六〇〇俵を与えられ、持筒足輕五十人を預かつたという。そして、同年八月五日に病死している。

この内、冒頭の「金山谷城罷在候処」という箇所は、寛文二年（一六六二）の『神保六右衛門由緒帳』⁽⁶⁾で「金山谷之城預り罷有」となっていることから、同城の守将を任され、（広い意味では）城主として在城していたと解される。問題はこの由緒帳に記す金山谷城が、果たして本来の金山谷城にあたるのかどうかである。すでに述べたように、江戸時代以来の混同の経緯を考えれば、城郭としての規模・構造からみて、守将の名を伝える城としては、北山集落西側山上の北山城がふさわしい。北山城が金山谷集落の背後を登り詰めた山上にあることから、神保氏が家伝の中で同城を「金山谷の城」と伝えているとしても不思議ではない。

ところで、由緒帳の記事には一部理解し難い箇所がある。諸国を移り、年数を経てることから、後世書かれた初代の事績の内容に混乱が見られることはよくある。問題の箇所は、「右衛門が初め金山谷城を守つていたが、本能寺の変で信長が死去後、兄弟共に浪人となり、右衛門の方は越後上杉家に仕えた」としている点である。実は兄の神保越中守長住は謙信の越中制圧を逃れ、織田信長の許に身を寄せ、その庇護を受けていた。しかし、天正六年（一五七八）三月謙信が急死すると、信長から越中帰国の命を受け⁽⁷⁾、当初は越中國内の織田方を結集する旗頭となつた。やがて上杉方の勢力を次第に越中東部へ圧迫するものの、同十年（一五八二）三月、上杉氏に通じた旧臣らに居城の富山城を奪われ、幽閉されてしまう⁽⁸⁾。まもなく柴田勝家ら織田軍の反撃により富山城は回復されるが、長住はこの事件の責任を負わされて失脚し、越中から退去するに至つた。

右衛門はこの間、兄と行動を共にしていたとみられるところから、「兄弟共に信長の死後浪人となつた」とする記述は、この長住失脚事件時のことと指すのであろう。その結果、越中を離れた長住に対し、右衛門の方は越中に残つて上杉氏に仕える道を選んだ。右衛門がそれまで敵であつた上杉方に身を投じた背景には、兄長住が織田方に失脚させられたことへの恨みがあつたかも知れない。

折から織田・上杉の攻防は山場を迎えており、上杉方では戦力となる右

衛門を招き入れ、織田方への備えを固める意図があつたとみられる。これにより右衛門は松倉に赴き、支城である北山城（由緒帳では「金山谷城」と記載）を預かり、同城を一時守つたと考えられる。だが、魚津城陥落直前の天正十年五月二十六日、上杉景勝は松倉を守る城兵に撤退を命じ、越後へと引き揚げた⁽⁹⁾。この時、右衛門も上杉勢と共に越後へ移つたのであろう。とすれば、右衛門の北山在城は天正十年四月から五月にかけての二か月程度であつたと推測できる。

このように越中の侍の中には、様々な事情で上杉方に属し、織田方に敵対した者達がいた。その中には魚津城や松倉城に入り、越後から来た上杉部将と共に守備を担う者もあつた。彼らは越後の者からは地元の侍衆、すなわち「地衆」と呼ばれ、区別された。たとえば、天正九年五月、上杉景勝が松倉・魚津城の守りを固めるために定めた捷書⁽¹⁰⁾には、「一 実城・中城江者、爰元より差越者共相移、其外之曲輪にハ地衆可差置事」（城の中核である実城・中城は越後の者で固め、越中の者はその外側の郭に配置すること）などとあるように、城内には厳然とした守備分担がなされていた。神保右衛門もこうした「地衆」の中に含まれていたとみられる。

ところで、越中神保氏の一部には右衛門の他にも上杉方に属した者がいた。そのことは、（天正十年）七月五日付あるいは（同十一年）二月十四日付で景勝の越中出馬を求めた越中諸将の連署状⁽¹¹⁾からも明らかである。連署した越中衆の内には、神保姓の者として神保近江入道信包、神保宗次郎昌国、神保民部大輔廣胤の名が見出せる。彼らは天正十一年三月の魚津城明け渡しにより須田満親と共に越後へ退去したとみられる。その後は越後にあつて上杉家に仕えたとみられるが、越中への復帰は叶わなかつたであろう。

三 越後から加賀への道——右衛門のその後——

由緒帳によれば、越後へ移つた右衛門は上杉家に仕え、慶長二年（一五九八）会津への国替えに従つたものの、同五年関ヶ原合戦の戦後処理により上杉家の所領が大幅に削減される事態となつた。これに対し、上杉氏と戦つた山形最上氏の方が大幅に所領拡大となつたことから、上杉家を去つて最上家に仕えている。しかし、後に最上家を辞しており、元和三年（一六一七）加賀へ来て、松平伯耆を通して前田利常に召し出されている。

最上家を辞した理由については、由緒帳に「其以後暇申請」とあるだけで、詳細は不明である。ただし、最上家では元和二年（一六一六）四月、家の譲言により当主最上家親が越中弓庄（現上市町）出身の土肥半左衛門を討滅する事件が起きている⁽¹²⁾。半左衛門は元弓庄城主土肥政繁の子で、父と共に越中から越後に移り上杉家に仕え、やはり関ヶ原合戦後に最上氏に仕えた経緯がある。

残された土肥の家臣らはこの事件を機に最上家を去つて出羽を退去し、同年六月、その内の有澤氏が加賀前田家に仕えている。右衛門が前田家に仕えた時期がそれと近いのは偶然であろうか。右衛門が同時期まで最上家に仕えていたとすれば、土肥氏の事件を契機に有澤氏らと前後して出羽を去つた可能性が高い。

いずれにせよ、織田・佐々に敵対し、越中を去つた侍達は一時浪人となり、主を求めて諸国を流浪するなど、再仕官まで苦難の道を歩んだはずである。なお、『諸士系譜』によれば、右衛門には二子あり、元和三年、兄左馬助は知行六百石を与えられ、第四郎右衛門は知行四百石を与えられている。この内、左馬助の夫人が上杉家の横田式部娘（由緒帳）⁽¹³⁾とあるのは、右衛門父子が上杉家に仕えていたことの名残であろうか。その後、左馬助の系統は大將、御使番、御馬廻などを務め、四郎右衛門の系統は御馬廻、御先筒頭などを務めている。こうして神保長住の弟の系統は代々、前田家にあつて、加賀藩士としての道を歩んだのである。

註

- (1) いざれも金沢市立玉川図書館所蔵。
- (2) 両城跡の概要については『魚津戦国紀行』（魚津市教育委員会、平成二十四年刊）を参照。金山谷城は北山城から見下ろされる位置にあり、構造・規模共にごく臨時性の強いものである。
- (3) 金沢市立玉川図書館所蔵。
- (4) 『上越市史』別編2、一八三三号。
- (5) 金沢市立玉川図書館所蔵。
- (6) 『越中志徵』所収。

角川文庫本『信長公記』卷十一。

同前、卷十五。

『富山県史』史料編三、四〇号。

『覚上公御書集』。

『富山県史』史料編三、五五号及び六五号。

『土肥家記』。

『御家中諸士略系譜』によると、横田式部は直江兼続に従い、三千石の知行を与えられている。

4 測量調査

(1) 測量調査の目的

松倉城跡は、平成四年度から七年度にかけて測量図の作成が行われた。当時の測量は、本丸から松倉城跡北西端の平ノ峰にかけての尾根上と大見城平等の主要部分について行われたものであった。しかしながらその後の現地調査等で、松倉城跡は既存の測量図よりもさらに広い範囲に主要な遺構が遺存していることが確認してきた。そのため、平成二十六年度から順次、主要な遺構が確認されている場所について既存の測量図に追加する形で図化作業を行うこととなつた。

平成二十六年度の測量調査は、松倉城跡で最も標高が高い平ノ峰と呼ばれる地点である。この平ノ峰は、東西方向に延びる尾根上に複数の空堀を配した、松倉城跡の中でも主要な曲輪の一つである。この西側の尾根について測量図の作成を行つた。

れに基づいて測量調査を行つた。測量図には、曲輪跡等の平坦面、土壙、堀跡等の遺構を可能な限り図示することとした。図面は、等高線のみの平面図、遺構のみを記した「遺構図」、さらに等高線を併せた「遺構平面図」の三種類を作成した。なお、図面は縮尺一、〇〇〇分の一である。

(7) 測量調査の成果（第6図）

作成した測量図をみると、平ノ峰西側の尾根上には五本の空堀が確認できる。東から順に、一つ目の空堀が、長さ二十四m、最大幅九m、深さ五・八m、二つ目の空堀が、長さ四〇m、最大幅八m、深さ五・九m、三つ目の空堀が、長さ二十五m、最大幅十一m、深さ六・五m、四つ目の空堀が、長さ四十一m、最大幅十一m、深さ五・六m、五つ目の空堀が長さ十二m、最大幅六・五m、深さ五mであつた。さらに、二つ目と三つ目の空堀の間には、長さ三十七m、幅四・九m程の細長い曲輪が確認できる。また、西側尾根の先端付近には林道が通つており、建設時に林道に沿つて尾根が削平されたことが確認できる。

既存の測量図の成果とあわせると、松倉城跡の最高所（標高四三〇m）である平ノ峰には、長さ四十四m、幅九mの曲輪がある。この曲輪からは東西南の三方に尾根が伸びており、東側の尾根上に三本、南側の尾根上に一本、今回測量した西側の尾根上に五本の計九本の空堀が掘られている。さらに北側は自然の急斜面になつており、平ノ峰を囲むように防御が図られていることが確認された。

(2) 現地調査期間

現地確認調査

平成二十六年六月十九日、十一月三十日

現地測量調査

平成二十六年六月十九日～九月十七日、十一月三十日

(3) 業務委託先

株式会社エイ・テック

(4) 調査対象地

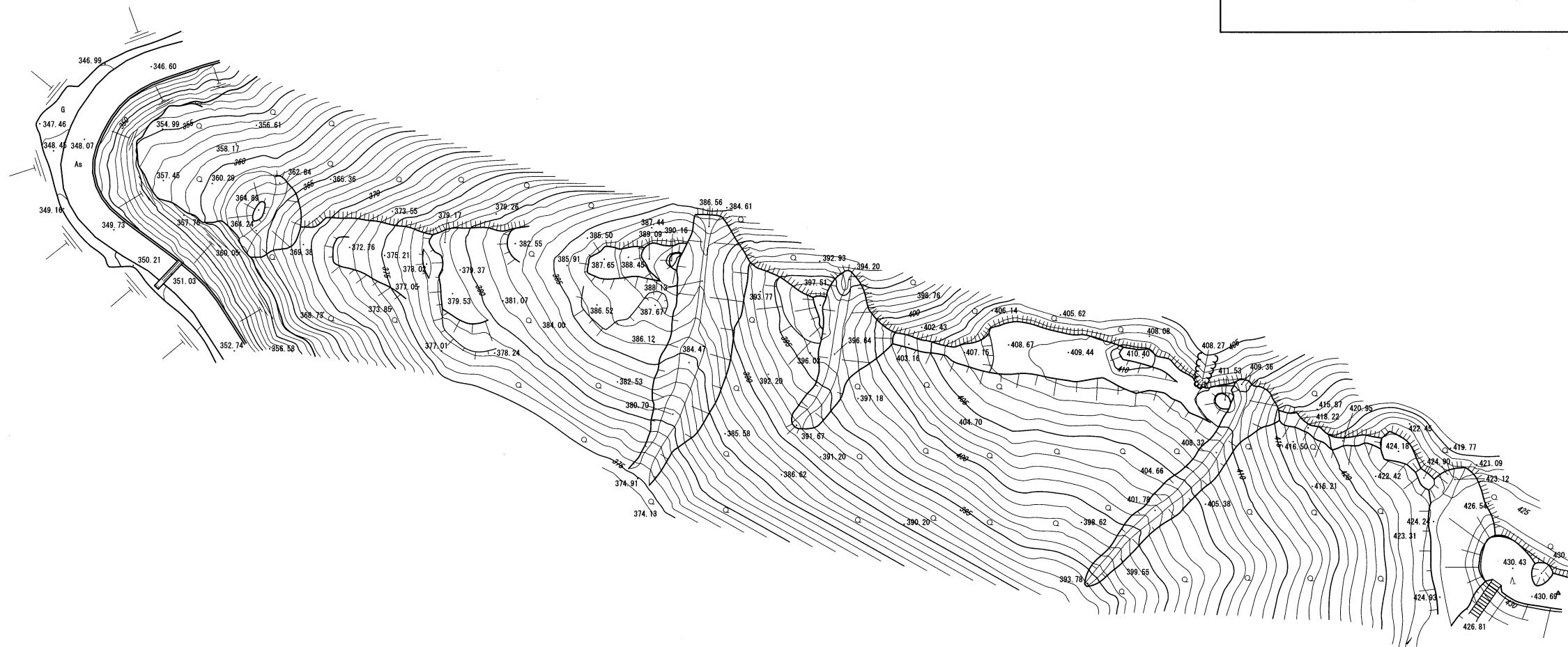
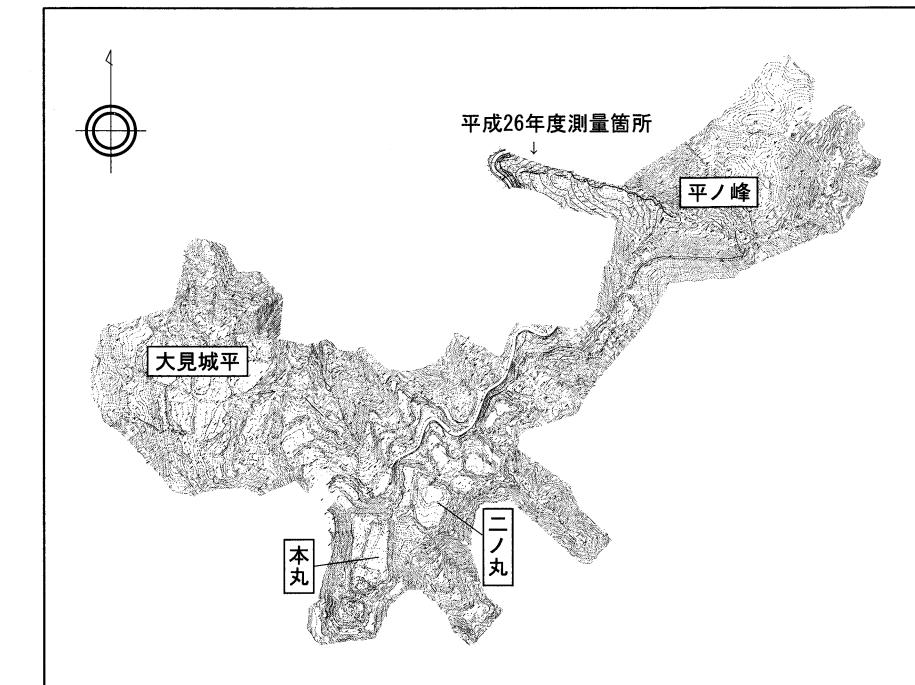
魚津市鹿熊字城山（松倉城跡）

(5) 調査対象面積

約一〇、〇〇〇²m

(6) 調査の方法

測量図の作成は、測量業者へ業務委託した。作業着手前に、委託業者と担当者が現地において遺構の分布状況や規模等について詳細に確認を行い、こ



第6図 平ノ峰西侧尾根の測量図（縮尺 1/800）

5 松倉城跡周辺の踏査

(1) 室田「テラヤシキ」遺跡の発見

室田地内に「テラヤシキ」と呼ばれる場所があることを知つたのは、平成二十五年のことである。松倉城周辺部の地名・伝承等の聞き取り調査がきっかけだつた。すぐ近くに室田砦跡があることから、気になる情報であり、翌二十六年四月、現地に案内してもらつた。

そこは現在の室田集落から山手の谷筋を少し登つた低い尾根筋の上にあつた。以前は畠に使われていた広い平坦面が目に飛び込んだ。山中にしては広さがあり、全体が方形に近いこと、奥に低い段があり、石積が設けてあることを確認し、寺院跡の可能性が考えられた。しかも、現在室田の墓地に存在する中世五輪塔類は、案内の富川茂樹氏によれば、かつてその段上にあつたものだという。六月に西井龍儀氏を案内して一巡した際、中心となる前記の平坦面を略測し、おおよその範囲を確認した。立地状況から見て、寺院跡の可能性が強まつた。



写真14 「室田テラヤシキ」遺跡を南側から見る

以上の予備調査に基づき、同
年十一月八日と十一日、十四日
の三日間にわたり全体の縄張図
の作成にあつた。この間、周
囲の小尾根も踏査し、全体のブ
ラン把握にも努めた。測量作業
中、古瀬戸の破片が採集された
ことは大きな収穫であり、当
地が中世の寺院跡であることが
裏付けられた。

ここでは、調査結果に基づき、
当遺跡の概要を簡単に報告して
おく。

立地状況
遺構は北東から南西に向けて

伸びた尾根筋の付け根を占め、東西両側に谷筋が走る。すぐ北側はやや高い山並で背後を遮られ、尾根筋の下る方向に視界が開けることから、南側を正面として作られたことがわかる。西北には谷筋を挟んで一段高く室田砦跡があり、その砦からは見下ろされる位置にある。

規模・構造（第7図）

遺構は中央の平坦面がある主体部と、東西両側の小尾根から成る（以下、遺構図参照）。遺構の南側に沿つて、東西の谷から尾根筋を越える旧道の跡が認められ、この道が谷筋から寺へ入るルートであつたことがわかる。主体部は谷状になつた尾根筋の上部を掘り込んで造成したとみられ、全体の広さは三三×八四m（東西×南北）程度である。その内部は北から南に向けて、A・B・Cの三段から成る。最奥部のA段が最も高く、B段から三mの高さがある。B段の南面には高さ七五cm程度で石を三段に積んだ石積が見られる。石積の間からは古瀬戸の破片が採集された。聞き取りによると、Bの段上には

昔、「五輪塔がごろごろしていた」とのことであり、墓地として使
われていた区画のようである。
とすれば、最奥のA段は住職墓
地の跡であろうか。

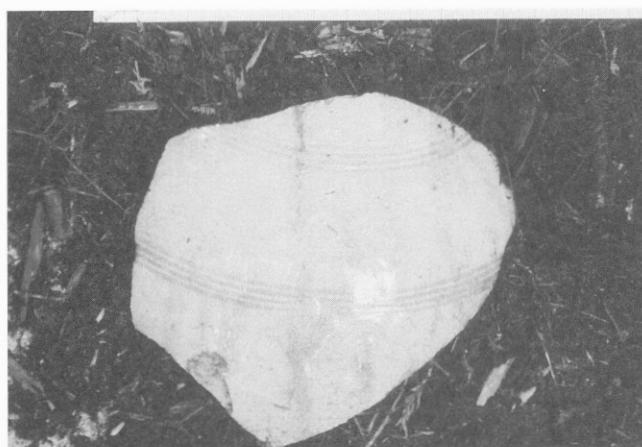


写真15 採集した古瀬戸の破片

最も広いCの段は三三×六〇mを測り、内部は後世に畠として使われたようだ。西北隅には池の跡（a）が見られる。そばの小尾根からしみ出した水を溜めて使つたものであろう。同様の水源は大熊の常泉寺跡にも残されている（『魚津戦国紀行』参照）。
寺の正面入口は、今のところ、はつきりしない。南面中央の窪んだあたり（b）かも知れない。一方、東南部には東の小尾根との

間に空堀状の窪み(C)があり、ここから下の旧道に出ていた形跡があることから、脇の出入口が存在した可能性がある。いずれにしても、今後の詳細な調査による確認を待ちたい。なお、前記の⑥付近から五輪塔の水輪二個(いずれもバンの梵字を刻む)が見つかっている。

主体部の東西両側には一段高く小尾根が伸び、谷筋との間を画している。西尾根では上部から平坦面(D)が緩やかに下り、半ばでC段との間に中段を設け、幅が広くなる。このあたりは後世、畑として使われた可能性がある。

東尾根は当初竹が密生し、状況が不明だったが、分け入って調査したところ、上部の付け根で一一×八mの方形の平坦面(E)を確認した。寺の関連施設が存在したとみられる。

このように山側を背に、中央を掘り込んで主体部を造成し、両翼に尾根を配し、側面を画するプランは、南砺市塔尾の専徳寺跡などでも見られる(高岡徹「浄土真宗専徳寺跡について」『富山市日本海文化研究所報』第四一号)。中世における山中寺院の典型例の一つと言えよう。

なお、他に①寺跡前面の旧道から南側へ続く尾根筋上部にも若干の平坦面が見られ、②寺跡の南東側に水田跡などの平坦面が残る点にも留意されるが、それらが寺に関連する遺構であるかどうかは今後の検討課題である。



写真16 室田テラヤシキ遺跡五輪塔確認状況



写真17 室田墓地 五輪塔

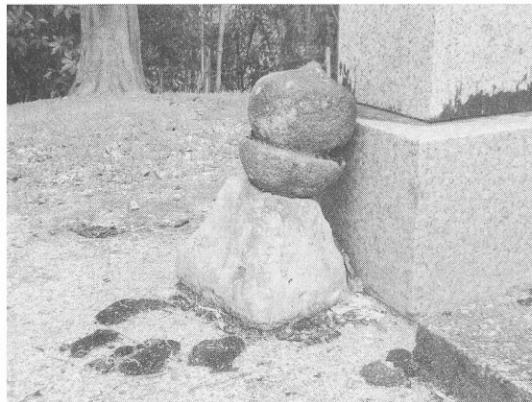


写真19 室田墓地 空風輪と火輪 (薮田石)

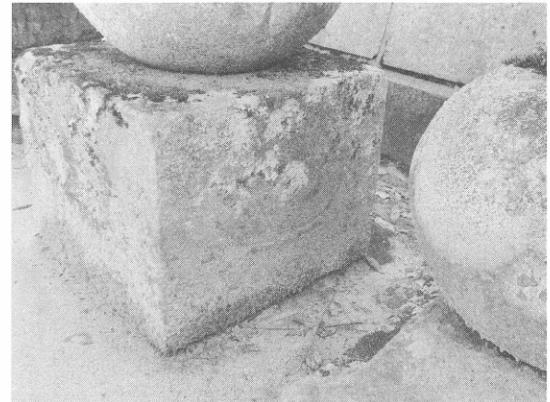


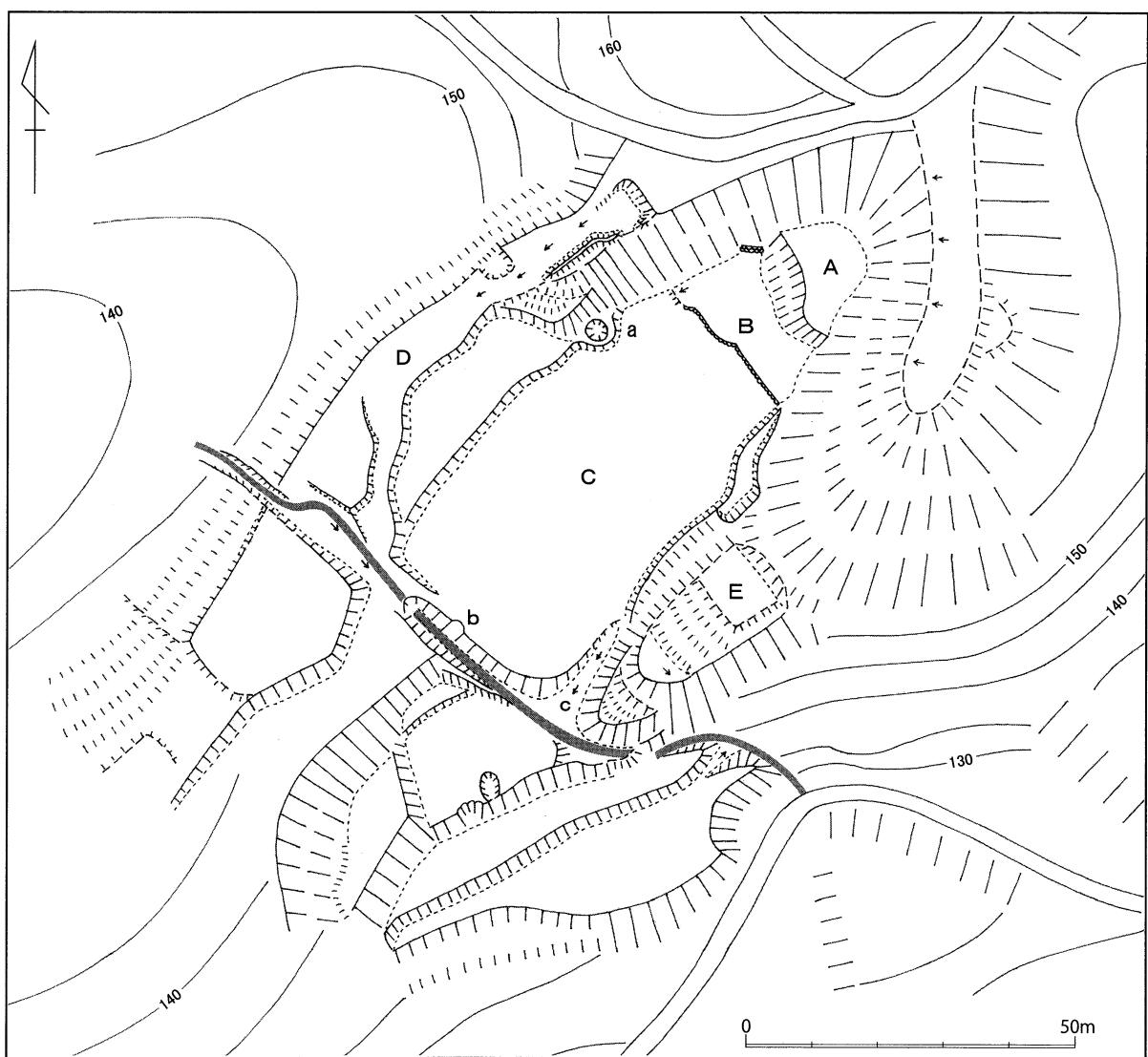
写真18 室田墓地 地輪 (蓮華浮彫)

最後に、もう一点。北西にそびえる室田砦との関係をどう見るか。これは当寺院跡の詳しい存立時期の解明とも関連する課題だが、今のところ、広大な縄張を有する室田砦は魚津城攻防戦(天正十年)に關わる織田軍の付城跡と推測したい。

考えており(『魚津戦国紀行』参照)、直接の関連性は薄いと思われる。寺院の存立はそれ以前の時期に遡るものと推測したい。

第1表 室田地内の中世石造物一覧表

確 認 地 点	部 位	高さ(cm)	幅 (cm)	刻 字	備 考
室 田 墓 地	空 風 輪	20	17		
	空 風 輪	21	15		
	火 火 輪	22	26		
	火 火 輪	14	28		
	水 水 輪	25	22	キリ	薮 田 石
	水 水 輪	21	34	キリ	月 輪
	水 水 輪	16.5	28	バ	蓮華浮彫
	水 水 輪	26	24	バ	
			34	バ	
				ン	
室田テラヤシキ遺跡	水 水 輪	16	25		
	水 水 輪	17.2	29	バ	



第7図 室田テラヤシキ遺跡遺構図

旧道跡

(作図 高岡 徹)

VI 特論

本能寺の変と松倉・魚津城

一 はじめに

天正十年六月の織田軍と松倉・魚津城に拠る上杉軍との戦いについて、これまである程度の実態が判明している。ただし、松倉城に言及した史料は極めて限定され、また魚津城陥落直後、織田諸将が本国へ撤退に移るまでの動向など、不明な点も残されていた。

そうしたなか、藤田達生氏が著書『天下統一』(平成二十六年四月刊)の中で柴田勝家が魚津城から越前へ撤退後に書いた新出の書状⁽¹⁾を紹介され、本能寺の変前後の松倉・魚津城と織田軍の動向を明らかにされた。本稿では、この柴田勝家書状を中心に当時の両城の状況や織田軍の動向などについて述べてみたい。

二 松倉城からの上杉軍撤退

書状は二点あり、Aは六月十日付で丹羽長秀家臣の栗屋五郎左衛門尉宛てたもの、Bは後欠だが、内容から六月十二日以降に同じ栗屋五郎左衛門尉に宛てたものとみられる。まず前者から見てみる。

(A) 悉属存分候処、此儀付而、彼面仕置共堅固ニ申付口、佐内蔵者^(五丈成政)越中、前又左能州、我等者^(前利家)昨日九日、至越前北庄帰陳候、惟五郎左大坂在番儀候、各被示合、其國^(若狭)慥御抱此時候、隣国儀候間、御用儀不可有疎意候、
(中略)

六月十日 勝家(花押)

栗屋五郎左衛門尉殿

御宿所

(C) 態以飛脚令申候、仍昨日廿六松倉明退、同夜子刻喜平次退散候、^(魚津城)當城者未相踏候、乍去城内尚以つまり申候、近日可為落居候、弥無相替儀候之間、可御心安候、猶自是可令申候、恐々謹言

五月廿七日

又左
利家(花押)

これは魚津城陥落後、本能寺の変報を聞いた勝家が、魚津方面の仕置を堅く命じたこと、佐々成政は越中に残り、前田利家は能登へ、勝家自身は九日に越前北庄に帰陣したことを述べる。また「惟五郎左大坂在番儀候条」とあることから、変の当時、丹羽長秀は(織田信澄と共に)大坂にいたことが知られ⁽²⁾、今は長秀の領国である若狭を栗屋が他の家臣らと連携を取つて確保することが大切だと伝えている。栗屋氏はこの時点で若狭にいたとみられる。次に後者の書状を掲げる(但し、全体が長文のため、越中関係の部分に限定)。

(B) 一、自是雖申猶令啓候、越後表之儀、長尾喜平次為後卷近々与取出、^(上杉景勝)陣中ニ松倉を乗取候、其夜喜平次敗北候條、小津城去三日卯刻乘崩、城中不洩一人茂二千余討果、其内大將之首共進上候、其刻くろべを指過、堺城及行之處、五日夜退散候、其より切所ノ々を拘城共何茂北破候処、六日此一義注進候間、前又左・佐内蔵令相談越中仕置仕佐内蔵ハ彼國相踏、又左ハ能州、拙者至北庄ニ九日ニ帰陣候、十日方々傳候を相調、則存分共申越事

ここではまず注目したいのは、冒頭の松倉城に言及している箇所である。「長尾喜平次為後卷近々与取出、在陣中ニ」とあるのは上杉景勝が魚津城救援のため、同城の北東にある片貝川右岸の天神山城に陣取つたことを指す。続いて勝家は景勝が在陣中に「松倉を乗取候」、すなわち攻め取つたとしている。

しかし、事実は少し違うようである。ここで次の前田利家書状を見ておきたい。

これは魚津在陣中の利家が、国許・能登七尾の兄安勝(五郎兵衛)に宛てた戦況報告であるが、「仍昨日廿六松倉明退、同夜子刻喜平次退散候」と記し、上杉勢が五月二十六日に松倉城から撤退したことを探している。

「明退」とあるのは、上杉勢が自ら城を出て、撤退したことを探しており、B史料で勝家が「松倉を乗取候」、すなわち攻め取つたように記すのは、対外的に誇張した表現だつたとみられる。

この頃、魚津・松倉城の状況はどうであつたか。実は、包囲下にある魚津城の方は、二の丸が五月六日の時点では織田方に奪われており、「本城」(本丸)だけになつた裸城の状態であり、極めて切迫した情勢だつた⁽⁴⁾ことが知られている。これに対し、松倉城の方は織田軍との戦闘を示す一次史料がほとんど残されていない。史料の残存状況だけで判断することは危険だが、当時の主戦場は魚津城周辺であり、松倉城周辺では両軍とも積極的に動かず、小競り合い程度で対峙のまま持久戦を図つていたと考えられる⁽⁵⁾。

ちょうどその時、景勝の許に織田軍が越後へ進攻したとの報せが届いた。春日山城を脅かす事態に直面した景勝は、直ちに主力の越後帰陣を決断せざるを得なかつた。見捨てられた形の魚津城が最悪の事態を迎えることは不可避免である。となれば、松倉城の城兵だけは魚津の二の舞いになることを避ける必要がある。このため、景勝はまず二十六日、松倉から城兵を山越えに天神山まで撤退させ、本隊に合流させたのち、同日深夜に越後へと引き揚げたとみられる。『越後治乱記』(『越佐史料』所収)もこの間の経緯を次のように記している。

(D) 信州海津の城主森勝蔵、越後へ乱入、さかいの田切を押破り、二本木・関の山・片貝・野尻・藤巻辺迄十四ヶ村放火して、其日の中に引退くと注進す、新発田籠城して居たるさい心元なきに、又、御留守へ敵の入けるよし告来れば、御供の上下弥脇をひやしける、去ハ御帰陣有へし、乍去魚津・松倉の者共を引取てこそと有けれ共、魚津の城ハ十重廿重に取

巻れて堅固にかこみければ、打ちらして引取へき様もなし、松倉斗も助

よとて、使者を立、其地を明て当陣へ参候へき由仰被遣たりけり、此松倉の城は、川田豊前守死去の後、番手にて勤たりしか、其時の在番黒金上野介・須田相模守・岩井備中守・菅名但馬守・楠川和泉・上野九兵衛なり、各仰に任せ、松倉の城明て御陣へそ参ける、魚津の者共不便成共、信州口おほつかなとして、五月廿七日に天神山を引払へ、越後へ帰陣せられたり

後世の史料ではあるが、魚津が極めて厳重な包囲下にあつて救出が困難であつたこと、松倉の城兵だけでも助けようと使者を送り、城を捨て天神山の陣まで撤退させた様子が知られ、興味深い。前掲のC史料はほぼこの記述を裏付けている。

この結果、城兵の退去を知つた織田軍は直後に空城となつた松倉城へ入り、同城を手に入れたことになろう。やはり後世の史料ではあるが、加賀藩士富田景周の『越登賀三州志』には、松倉城を奪つた状況を次のように記しており、参考までに掲げたい。

(E) 松倉の守兵城上に旗槍を羅列し、守禦の形勢を何んとして、夜越後へ走る。織田方の諸将之を知らず、妄に近づかずと云ふ。我が公は然らずとし、単騎にて城下に到つて見量らひ玉ふに、果して空城也。因つて一箭の費なくして斯の城を得たり。

単騎で城下に乗り込むなど、いかにも前田利家の智将・勇将ぶりが際立つ話だが、真偽のほどはわからない。ただ、城兵が撤退を悟られぬよう、旗や槍を城内に並べ立てたとしている点は、古典的な常道とは言え、事実であつたかも知れない。それにしても、対峙・監視状況のなか、山陰から山間を縫うように密かに城兵を天神山まで撤退させることは大きな危険が伴つたことであろう。ルートの詳細は不明だが、一つの推測としては、松倉城裏東側の谷筋から坪野城・大菅沼・島尻を経て片貝川を渡り、右岸沿いに天神山に入つたとも考えられる。

ともかく、ここまで検討から、勝家が「松倉を乗取候」と述べているのは、いささか対外的に誇張した表現だつたことが知られよう。松倉城について

ては、従来、C史料により上杉勢の撤退のみが知られていた。しかし、今回の勝家書状(B史料)によつて織田方が直後に一部の軍勢を入れて松倉城を確保したことことが明らかになつた。なお、城兵の撤退後、同夜景勝が天神山から引き揚げたことは、勝家が「其夜喜平次敗北候」と述べているとおりであり、C史料の前田利家書状の内容とも合致する。

三 魚津城の陥落

Bの勝家書状によれば、援軍を断たれた魚津城は「去三日卯刻乗崩、城中不洩一人茂二千余討果、其内大将之首共進上候」となつた。すなわち、六月三日の卯の刻(午前六時)に織田勢が突入し、城中にいた者を「一人も洩らさず、二千人余を討ち果たした」という。突入の日時については、六月五日付の佐々成政書状⁽⁶⁾に「仍一昨日三日卯刻小津城へ乗入」とあるのに合致し、城兵についても「大将分十三人、其外城中二籠候者一人も不残悉討果申候」とあつて、やはり一人も残さず討ち果たしたとしている。

ただし、成政書状には討ち取つた城兵の人数を記さないが、勝家は「二千余」としている。陥落時の城兵の数については、一次史料でこれまで記した史料がないものの、本丸だけの一郭を残すのみで、果たして二千人余も籠つていたかどうかは疑問である。せいぜい数百人程度の数だったとみられるので、この点は対外的に誇張して記したのであろう。

次に注目されるのは、勝家が「大将之首共進上候」と記している点である。守将の数は、成政書状によれば十三人であり、彼らの首が落城後に「進上」されたのである。これら十三人の守将の名は、



写真20 上杉景勝が本陣を置いた天神山(手前は片貝川)

同年四月十三日付の景勝書状と二十三日付の守将らの連署状⁽⁷⁾から、中条景泰・竹俣慶綱・吉江信景・同宗闇・寺嶋長資・蓼沼泰重・藤丸勝俊・龜田長乘・若林家吉・石口広宗・安部政吉・三本寺景長・長与次であつたことが判明する。

首の獻上は、今回初めて明らかになつた点である。守将の首の獻上は敵城攻略の証であり、勝家は最大の任務であつた魚津城攻略を果たした証として、上方の主君信長の許へ最優先で送つたに違いない⁽⁸⁾。だが、上方はまもなく一大混亂の渦の中に巻き込まれ、使者が信長に見えることは叶わず、無論、首の行方についても一切不明である。

ところで、勝家・成政共に魚津城の攻略時に城兵を一人残らず討ち果たしたと述べているが、事実であろうか。実は後世、地元の伝承なども含め書き記した『越中四郡古城跡略記』⁽⁹⁾によると、攻防戦は最終的に「扱い」(和談)が成立し、上杉方が本丸を明け渡して退去することになつていたという。

同史料には、この時の明け渡しの模様を「地侍之分者本丸橋より出シ、越後勢ハ明ル日大手ら門川ノ方へ出シ、跡先ら取つゝミ、不残討申由」と記し、城内にいた將兵の内、地侍(越中の侍達)は一日早く退城し、越後の者達だけが翌日退城したところを織田方が包囲して一人残らず討ち取つたと伝えている。このことは成政書状に次郎右衛門が人質として城内に入り、切腹したことを記しているので、恐らく事実であろう。その背景には、信長による城兵討滅の強い指示があつたことも見逃せない。

四 越後国境への進撃

今回の勝家(B)書状の中で最も注目されるのは、魚津城陥落直後の織田軍の動きである。これまでには、本能寺の変報が届いたところで、柴田・前田らが急ぎ国許へ戻つたこと以外は知られていないかった。同書状によれば、陥落後「其刻くろべを指過、堺城及行之処、五日夜退散候」とあって、北の黒部川を越え、「堺城」まで兵を進めたところ、五日の夜、守る上杉勢が城を捨て撤退したと述べている。

「堺城」(境城、別名宮崎城。現朝日町)とは越中東端の山城で、越後国境の要衝として知られる。そうであれば、柴田らの織田軍は魚津城攻略後、間を置くことなく越後国境に向け進撃を開始したことがわかる。時間的に見て、

魚津城を落とした翌日の四日か翌々日の五日であろう。このことは、その少し前まで天神山城に一部の上杉勢が残留し、陣取つていた可能性を示している。そのため、織田軍は景勝の撤退(五月二十六日夜)を追撃できなかつたとみられる。

しかし、六月四日か五日に織田軍が堺城へ向け進撃したということは、天神山城に残留していた上杉勢がすでに退去していたことを物語つている。とは言え、さすがに国境の堺城にはまだ上杉勢の一部が城を守つていた。だが、それも織田勢の勢いを見て、五日夜中に越後へ退いたのである。その後は「其より切所／＼を拘城共何茂北破候処、六日此一義注進候間」とあつて、要害となる上杉方の城はどれも守兵が逃れてしまつたことを述べている。この時点では織田軍は越後に突入寸前だつたことがわかる。だが、翌六日になつて、ついに本能寺の変報がもたらされたのである。

報せを聞いた勝家は直ちに本国越前へ引き揚げた。北庄城に着いたのは九月であつたといふ。引き揚げ前に前田・佐々との善後策の協議が行われ、越中の仕置は成政に任せて利家は能登、勝家は越前へ帰陣することになつたといふ。

五 おわりに

以上、新出の柴田勝家書状を中心的に越中松倉・魚津城をめぐる本能寺の変前後の状況を見てきた。

今回の新出史料により明らかになつた最大の点は、織田軍が魚津城を攻略後、そこで留まることなく越中東端の堺城へ進撃し、五日夜にはそこを奪つて越後国境に達したことであろう。まさに織田軍は越後突入寸前だつたわけだが、本能寺の変という大事件により、後を任された佐々成政はまもなく魚津



写真21 堀城（別名 宮崎城）跡遠望

城攻撃以前の状況に引き戻されるのである。

末尾ながら、今回の勝家書状に関し、懇切に紹介いただいた藤田達生氏に謝意を表したい。

註

- (1) 宮下玄霸氏所蔵。平成二十四年に織田信長展実行委員会が発行した岐阜市歴史博物館展覧会図録『織田信長と美濃・尾張』に写真掲載。
- (2) 藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』前田育徳会所蔵『富山県史』史料編Ⅲ、四〇号。
- (3) (4) 五月九日付前田利家書状に「仍当城二丸去六日乗崩、本城計罷成候」（前田育徳会所蔵『富山県史』史料編Ⅲ、三九号）とある。
- (5) 高岡徹「松倉城」（『魚津戦国紀行—城と文書が語る魚津の戦国史』）魚津市教育委員会（参考）。
- (6) 佐野氏旧蔵『富山県史』史料編Ⅲ、四一号。
- (7) (8) 前者は反町英作氏所蔵『上越市史』別編二、一二三四八号。後者は山形大学付属図書館所蔵『上越市史』別編二、一二三五九号。
- (9) 織田の部将が敵城攻略後、城主の首を信長に「進上」する例はよくあつた。たとえば、天正五年（一五七七）秀吉が播磨上月城を攻略した際や、同八年播磨三木城を攻略した際、また同十年織田信忠が武田方の信濃高遠城を攻略した際など、いずれも城主の首が信長の許に進上されている（『信長公記』）。
- 金沢市立玉川図書館所蔵。

松倉城関係年表

年号	西暦	松倉城をめぐる動き	注記	出典	
建武五 貞和一 同四 同五 同六	一一三三八 一一四六 一一四八 一一六九 一二三七〇 一二三七〇 一二四一八 一二五〇〇 一二五二一 一二五六〇 一二五六一 一二五六三	七月、越後の南朝軍が越中守護の普門俊清勢を国境で破り、加賀へ向かう。俊清は「松倉城」へ引き籠もる。 七月、「松倉」・「水尾南山要害」・「水尾城」において、前越中守護井上（普門）俊清が吉見頼隆勢と戦う。まもなく俊清は幕府方に降っている。 「松倉」に城郭を構えた井上俊清を吉見氏頼が攻め、十月十二日夜、俊清は逃れて「内山城」 ⁽¹⁾ にたて籠もる。 四月、前越中守護桃井直常方の「松倉城」が没落したという。 九月、桃井直常が「松倉城」に引き籠もり、翌月、幕府方の吉見・斯波勢が攻撃に向かう。 三月、婦負郡長沢の合戦において桃井直常の子直和が討死し、「松倉城」にたて籠もある桃井方も降参・没落したという ⁽²⁾ 。 管領畠山満家が越後での争乱に備え、国境側の拠点となる松倉城 ⁽³⁾ を警戒態勢下に置く。 十一月、畠山尚順が越後の長尾為景に新川郡守護代職を与える。同月二十一日、為景は新庄の戦いで神保・椎名 ⁽⁴⁾ を破る。 十月、越中守護家からの依頼により、能登の畠山義統が神保・椎名の抗争を仲介するため、家臣を富山に派遣する ⁽⁴⁾ 。	(1)内山城の正確な所在地は不明。 (2)桃井直常は翌応安四年七月、越中西部・五位庄の戦いで敗れ、越中から姿を消している（花當二代記『富史』II、四三八号）。 (3)原文は「松岡（城）」と表記。 (4)抗争は神保長職の富山進出・築城により生じたが、翌年両者の和議が成立し、長職の富山築城が容認された。	太平記（『富史』II、一三三四四号） 得田文書（『富史』II、一八一号） 花當二代記（『富史』II、四二二号） 同前（『富史』II、四二二号）、得田文書・得江文書（『富史』II、四五五～四七号） 花當二代記（『富史』II、四二一八号） 花當二代記（『富史』II、四二一八号） 福王寺文書（『富史』II、一六一四号） 前田育徳会所蔵文書（『富史』II、一四六七号） 満済准后日記（『富史』II、六二六号） 上杉家文書（『富史』II、一三一四号・一三〇一号） 諸家文書纂（『金沢市史』資料編2、四九〇号）	太平記（『富史』II、一三三四四号） 得田文書（『富史』II、一八一号） 花當二代記（『富史』II、四二二号） 同前（『富史』II、四二二号）、得田文書・得江文書（『富史』II、四五五～四七号） 花當二代記（『富史』II、四二一八号） 花當二代記（『富史』II、四二一八号） 福王寺文書（『富史』II、一六一四号） 前田育徳会所蔵文書（『富史』II、一四六七号） 満済准后日記（『富史』II、六二六号） 上杉家文書（『富史』II、一三一四号・一三〇一号） 諸家文書纂（『金沢市史』資料編2、四九〇号）
永禄二 同五 同六	一一五六〇 一一五六一 一一五六三	この頃、越後から長尾小四郎景直が椎名康胤の養子に入る。 神保長職が椎名方を圧迫したため、長尾景虎（のちの上杉謙信。以下、謙信と記す）が、三月越中へ出陣し、長職から富山城などを奪つ。 この頃、越後から長尾小四郎景直が椎名康胤の養子に入る。	(5)これに対し、謙信は椎名康胤を救援するため、越中に出陣し、長職のたて籠もある増山城を攻め、降伏に追い込んだ（乙川忠榮次所蔵文書『富史』II、一六三四号）。	太平記（『富史』II、一三三四四号） 得田文書（『富史』II、一八一号） 花當二代記（『富史』II、四二二号） 同前（『富史』II、四二二号）、得田文書・得江文書（『富史』II、四五五～四七号） 花當二代記（『富史』II、四二一八号） 花當二代記（『富史』II、四二一八号） 福王寺文書（『富史』II、一六一四号） 前田育徳会所蔵文書（『富史』II、一四六七号） 満済准后日記（『富史』II、六二六号） 上杉家文書（『富史』II、一三一四号・一三〇一号） 諸家文書纂（『金沢市史』資料編2、四九〇号）	
所藏	永禄六年北国下り遣足帳（国立歴史民俗博物館所蔵）	（6）何らかの寺務のため、越後・関東・南東北へ旅しており、帰路は翌七年十月、「大津」（魚津）の旅籠に泊まっている。			

慶長三頃	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	元龜四	同十一	同十一	同十一						
一五九八	一五八二	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五七九	一五七八	一五七三	一五六四	一五六九	一五六四	三月、島山義綱の能登帰国を支援するため、謙信が越中に出陣したが、本庄繁長の反乱により放生津より撤退し、帰陣の途上、「松倉」城に入る。						
前田利家が松倉を視察し、同城を廃し、升形山へ城を移したという。	四月、上杉方が奪取した富山城より退去後、柴田らの織田軍が魚津・松倉方面に攻め寄せ、陣を張る。	五月二十六日、松倉城の守兵が城を出て天神山の景勝陣に合流し、同夜、越後へ向け撤退する。	前田利家が松倉を視察し、同城を廃し、升形山へ城を移したという。	椎名康胤が武田信玄と結び、謙信に敵対したため、八月謙信が越中へ出陣し、松倉城を孤立化させる。まもなく謙信は康胤と和議を結んだとみられ、十月二十七日、春日山に帰陣する。和議に伴い、康胤自身は松倉城から退去したと考えられる。	富山城を拠点化した一向一揆に対し、謙信が向城を築いて包囲し、四月、「松倉」城まで帰陣する。	五月、椎名浪人 <small>(フ)</small> が新川郡の海岸地帯を襲つ。	五月、椎名浪人 <small>(フ)</small> が新川郡の海岸地帯を襲つ。	三月十三日、越中を制圧していた謙信が急死する。	十月四日、松倉城の守将河田長親が月岡野で織田軍と戦い、敗れる。	十月、信長が松倉方面の状況について長好連より報告を受ける。	九月、織田方の神保長住が「金山（松倉）城下」まで進攻し、付近で放火・刈田を行う。	三月二十四日、河田長親が没したといつ。	四月八日、河田長親の病死に伴い、上杉景勝が松倉城の守備強化を命じる。	五月二十八日、景勝が松倉・魚津城の守備の捷を定める。	七月、景勝が山田修理亮から魚津・松倉城の状況について報告を受け、大石右衛門の派遣と、両城への監視役の配置を命じる。	一月、景勝が昨年冬、魚津・松倉の守備を強化したことを色々長真に伝える。	三月、信長が柴田勝家による松倉攻撃について、油断せぬよう指示を与える。	四月、上杉方が奪取した富山城より退去後、柴田らの織田軍が魚津・松倉方面に攻め寄せ、陣を張る。	五月二十六日、松倉城の守兵が城を出て天神山の景勝陣に合流し、同夜、越後へ向け撤退する。	前田利家が松倉を視察し、同城を廃し、升形山へ城を移したという。	椎名康胤が武田信玄と結び、謙信に敵対したため、八月謙信が越中へ出陣し、松倉城を孤立化させる。まもなく謙信は康胤と和議を結んだとみられ、十月二十七日、春日山に帰陣する。和議に伴い、康胤自身は松倉城から退去したと考えられる。	富山城を拠点化した一向一揆に対し、謙信が向城を築いて包囲し、四月、「松倉」城まで帰陣する。	五月、椎名浪人 <small>(フ)</small> が新川郡の海岸地帯を襲つ。	三月、島山義綱の能登帰国を支援するため、謙信が越中に出陣したが、本庄繁長の反乱により放生津より撤退し、帰陣の途上、「松倉」城に入る。
上杉家文書（『富史』Ⅱ、一八一三号・一八一四号） 岡田紅陽所蔵文書（『富史』Ⅱ、一八一七号） （フ）上杉氏の松倉城接收により浪人となつた椎名旧臣達を指す。	同前（『富史』Ⅱ、一八九〇号） 『信長公記』卷十一 長家古文書類纂（『富史』Ⅱ、一九三七号） 北国鎮定書札類（『富史』Ⅱ、一九六九号） 御家中諸士略系譜 歴代古案（『富史』Ⅲ、四四号） 景勝公御年譜（『富史』Ⅲ、一二号） 同前（『富史』Ⅲ、一四四号） 越佐史料（『富史』Ⅲ、三一一号） 別本歴代古案（『富史』Ⅲ、三八号） 前田育徳会所蔵文書（『富史』Ⅲ、四〇号） 越登賀三州志 故墟考	坪坂文書（『富史』Ⅱ、一六七八号） 大河原辰次郎所蔵文書（『富史』Ⅱ、一六九九号）																						

富山県魚津市
松倉城郭群調査概要

発行日 平成二十七年三月二十四日
編集・発行 魚津市教育委員会

一九三七一〇〇六六

富山県魚津市北鬼江三二三一二
TEL(〇七六五)一三一〇四五
魚津印刷株式会社

印 刷

